



令和3年靖國神社の絵馬



第134号

特攻隊戦没者  
 公益財団法人 慰霊顕彰会  
 編集人 金子敬志  
 発行人 石井光政  
 印刷所 島根印刷株式会社

目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事長 藤田幸生 2  
 各地慰霊祭参加報告  
 長野県特攻勇士の慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事 鮎田英一 4  
 埼玉県特攻勇士之像慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 秋山政隆 5  
 第四十七回若潮の塔慰霊祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 高松真紀 6

会員等投稿

告白・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 理事 大徳その井 9

桶川飛行学校跡研修報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 原 知崇 12

百里基地（百里原海軍航空隊）研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 評議員 及川昌彦 14

海上挺進第18戦隊及び基地第18大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎 15

オバンド・パコの戦闘・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第17戦隊長 鶴田 徹 19

凄絶”帰ってきた血染めの日章旗”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第17戦隊長 鶴田 徹 20

海上挺進第19戦隊及び基地第19大隊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 中溝二郎 22

海上挺進第19戦隊戦闘行動経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 第19戦隊 古角 孝 24

イリサンの戦車特攻（再掲載）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

顕彰譜（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

連載 山ある記13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 会員 池田康博 44

芸欄 歌俳柳の広場

短歌・俳句・川柳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

事務局からの報告等

令和2年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

第42回特攻隊全戦没者慰霊祭の縮小斎行について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

会報記事の訂正・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

寄付者等の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

挿絵提供 空自OB 宇山氏

## 「巻頭言」

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長

藤田 幸生



## 「崔三然」様とのお別れ

崔三然様のご冥福を、お祈り申し上げます！

令和二年に、「朝鮮半島（現北朝鮮）のご出身で、日本に在住されていた崔三然という知人」が、92歳で、ご逝去された。

ご遺族から、知らせを受けたが、葬儀等に参列できず、「弔辞」を書いて、お届けた。

後日、館山の自宅に、お嬢様から、直接涙ながらのお礼電話を頂いた。お別れの

時、彼の枕元で、私の書いた弔辞を、読んであげてくれたそうだ。私は、もらい泣きをした。

少し、崔三然様とのことを述べてみたい。インターネットでも、崔さんのことは出ている。

私が、崔さんに初めて出逢ったのは、2013年4月13日、土浦市のホテルで催行された「藤田多美子」女史の鎮魂式であった。

藤田多美子女史は、昭和15年11月28日に、22歳の若さで、当時、多発していた『航空事故の根絶』を祈願して、自ら「人身御供」となって、入水自殺されている方だ。

当時、崔さんは、日本陸軍のパイロットとして、訓練されていたという。このことをご存じであり、鎮魂式に、役員として参列されていた。私も、藤田多美子女史のことは、飛行学生の時から知っていた。というのは、命日が、私の誕生日でもあり、ご縁を感じて、知っていたのである。自分自身の「飛行安全の守り神」と、考えていた。という訳で、この鎮魂式に参列していたので、その場で一緒に面談できたのであった。その時は、「朝鮮半島出身者にも、奇特定の方が居られる

のだな！」との、印象であった。

次にお会いできたのは、「世田谷山観音寺」における「特攻観音」月例参拝の場であった。

幾度か、月例参拝にお出で頂き、お話しが出来た。同期生が、陸軍航空特攻戦死されていたのである。

最後にお会いできたのは、東郷神社の会館で行われた、崔三然様の長寿祝いの会に、ご招待されたときであった。その時は、崔三然様のご家族皆さんでのお祝いであり、皆さんと面談できた。その場に、ご招待を受けたのである。その時は、幸せそうな崔さんであった。日本の各界の知人が、招待を受け集まってお祝いをしてさしあげていた。

崔さんは、旧日本陸軍の操縦士であった。終戦後、韓国空軍に入り、朝鮮戦争を戦い抜き、戦後、日本人として過ごしてこられている。日本人以上に、日本人らしい方であった。

その崔三然様のご冥福を、心からお祈り申し上げます。 合掌！

(参考) 平成25年のインターネットから  
抜粋

昭和15年、相次ぐ戦闘機事故の根絶を願って水戸陸軍航空通信学校(現・水戸市住吉町)の井戸に身を投げ、「大空の女神」と呼ばれた藤田多美子さん(当時(22))の鎮魂式が平成25年4月13日、土浦市内のホテルで開かれた。会場には、平成24年11月に陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地に安置された藤田さんの胸像と遺影が置かれ、参列者は花を手向けて乙女の遺志を後世に語り継ぐことを誓った。

水戸陸軍航空通信学校の井戸に、近くに住む藤田さんが身を投げたのは昭和15年11月28日。遺書には「大君の御楯(みたて)となれる益荒男(ますらお)の(空の勇士にこの身捧(ささ)げん」と辞世の句がつづられていた。その行動はたえられ、校内に胸像と歌碑が建てられたが戦後は撤去され、藤田さんの遺志も長く忘れ去られていた。

この話を知った作家の拳骨(げんこつ)拓史さん(36)と水戸陸軍航空通信学校出身の崔三然(さい・さんぜん)さん

(85)が胸像などの安置を計画、平成24年11月に霞ヶ浦駐屯地への安置が実現した。

式典は日本郷友連盟茨城県郷友会が中心となって参列者を集い、遺族ら約80人が出席。日本郷友連盟の寺島泰三会長(80)は、「あなたの愛国の念に燃えた行動は、多くの戦士に勇気を与えた。戦後に忘れられたことは遺憾だが、駐屯地に安置され、式典が挙行されることは喜ばしい限り」と鎮魂の言葉を述べた。

藤田さんの妹の増田芳江さん(91)は式典後の直会(なおらい)で、「感謝の気持ちでいっぱい」とあいさつし、「空の安全を願い、声が出ない姉の代わりに」と藤田さんの辞世の句を吟じた。

拳骨氏は「(胸像などが)安置でき、最初のスタートラインに立てた。鎮魂に終わりはなく、今後、私たちのような若年が藤田さんの精神を継承していきたい」と話していた。



令和2年度 長野縣護國神社 特攻勇士  
の慰靈祭に参列して

理事 鮎田 英一

令和2年10月10日、長野縣護國神社（松本市松本市美須々）における「特攻勇士の慰靈祭」に参列した。

強い台風14号の北上接近に伴い、前日から信越地方は雨域に入り、当日午前中は篠突く雨となった。慰靈祭の成り行きを心配したが、英靈のご加護の賜物か、台風は予想進路から一転して南下し、正午には雨が上がり、野外での慰靈祭は14時から予定通り実施された。

今年は新型コロナウイルス感染防止のために、各地における慰靈行事は中止ないし規模を縮小しての開催となったところが多い。本慰靈祭も、当初は神職、総代ほか一部関係者の方々のみによる斎行予定であったが、当会が特攻勇士之像を奉納させていただいたご縁から、奥谷宮司のご厚意により東京からの参列を特別にお許しいただいた。

特攻勇士之像は、約1万坪を誇る広い境内の中において、本殿正面前の石畳の参道間近に建立されている。当日、神社境内には七五三を祝う家族連れや参道沿いの露店商関係者の姿が見られた。今年

はコロナ感染により県内の様々な行事が中止となり、特に露店商は営業を規制されたという。そのため例年は露店が連なることはない本神社ではあるが、感染状況が少し収束した時期を見計らい、地域活性化と疫病退散の願いを籠め、特に露店の出店が企画されたとのことであった。特攻勇士之像の前には、地元崇敬者奉賛会会長、地元国会議員代理、長野県隊友会会長など十数名が参列した。祭典は、修祓の儀、降神の儀、献饌、祝詞奏上、祭主及び参列者による玉串奉奠、撤饌、昇神の儀の順により厳粛に執り行われた。コロナ禍であり、祭典中止の選択もあつた得たであろうが、宮司様を始めとして関係者の皆様の熱意により、参列者の規模縮小という制約された条件下で、例年どおり、特攻勇士をお祀りする慰靈祭を斎行してくださったことは、誠に意義深く有難い限りであった。こうした地元の方々のご熱意のもと、本慰靈祭は末永く続いていくであろうと思われる。

この日は、コロナ感染防止の観点から、例年とは異なり直会を通じた意見交換の機会は設けられず、祭事終了後、参列者は速やかに解散した。すがすがしい雨上がりの境内には、子供連れの参詣者や露店商関係者の声で賑わいと活気が見られ、特攻勇士の慰靈には、この上なく佳き日和であった。



長野県特攻勇士之像



長野縣護國神社 正面入り口



埼玉県「特攻勇士之像」慰霊祭に参列して

評議員 秋山 政隆

令和2年10月31日土曜、埼玉縣護國神社「特攻勇士之像」前にて斎行されました埼玉県特攻隊慰霊祭について報告します。

秋晴れの中、ご遺族・戦友を含め、38名が参列した。コロナ禍の最中にもかかわらず、英霊に哀悼の誠を捧げたいというお心ある方、多数にご参集頂いた。

当顕彰会金子敬志「特攻」編集長の司会により国家斉唱から始まり、埼玉県特攻戦没者に対しての黙祷、埼玉縣護國神社禰宜山田信之氏の神事で執り行われた。追悼文は当顕彰会の岩崎茂副理事長により奏上され参列者全員による玉串奉奠後、埼玉県特攻勇士之像奉賛会の関根則之会長（海兵78期）の挨拶で式典が締めくくられた。

会場を護國神社社務所2階へと移して直会となった。恒例の関根会長による講話では次のお話があった。

最近では自殺者の数が年間およそ2万人と聞く。殊に若者の自殺者が多いという。命は最高の価値をもっており、どの程度の尊さかを理解しているのか今一度、学校教育を含め見直すべきだ。命という

ものは、自分のものだけではない。民主主義の世の中において個人が大切というが、人は一人では生きて行けないものだ。誰しもが共同体である家族、地域社会、国家に守られ、支援されて尊い命を全うすることが出来る。特に生を担保してくる共同体である国家に対しては礼儀として忠誠を誓い、恩返しをしなければならぬのか。どういう形で返すか。それは、誠実であり、嘘をつかない。裏切らない。これらの道徳の基本となる心をもって生きることに他ならないのではないか。その最高の価値を持つている共同体に、最高の道徳の發揮されて命を捧げられたのが、特攻勇士である。戦時中は、出征して行くときには、町や村をあげて歓呼の声で送った。武運長久を祈るが、悔しいけれども命を失うことがあった時には、靖國神社に神としてお祀りをする、ずっと尊敬すると日本国民全体として約束した。戦争は終わり、一部には今は違う、そんなことは知らないという人もあるが、

これは人間の行動として一番守らねばならないことなのだ。英霊顕彰、靖國神社の護持、護國神社の護持は日本国民の連帯責任だと思ふ。そういう意味で英霊に対する慰霊顕彰をしっかりとやっていかなければならない、それが最後の日本国民の履行行為ではなからうか。終わりに本日参集各位には今後、なお一層の慰霊顕

彰に改めて協力を呼びかけられた。続いて、岩崎茂副理事長による献杯で始まった直会は埼玉縣遺族会や埼玉偕行会、大宮遺族会、英霊にこたえる会、大東亜戦争全戦没者慰霊協議会、甲飛会からの参加者で和気あいあいとした雰囲気でもめて参加された方も交え懇親も深められた。

また、慰霊祭終了後に予定されている研修（顕彰会主催）の件も含め、臼田理事より、桶川陸軍飛行場資料館完成の報告があった。終わりに柳澤壽昭埼玉偕行会会長による来年以降は隊友会も積極的に協力していきたいという閉会の辞で締めくくられた。



岩崎副理事長による玉串奉奠

第四十七回若潮の塔慰霊祭に参列して

評議員 高松 真希

令和2年11月23日(月)に香川県小豆郡土庄町にある富丘八幡神社内・若潮の塔の碑前にて「第四十七回若潮の塔慰霊祭」が実施されました。

この慰霊祭に当慰霊顕彰会から参列させて頂きましたので、ご報告申し上げます。

一 道程

富丘八幡神社までの道のりは、まずはフェリーで小豆島に入ることから始まる。島内の各港からはバスかタクシーで移動して神社へ到着となる。

慰霊祭前夜から当日の朝にかけて小豆島は静かな雨に包まれていたが、陽が昇ると同時に見事な日本晴れとなった。湾を進むと海と山が同時に視界に入ってくる。島はちやうど紅葉が見頃を迎え、空と海の澄みきった青に山々の醸し出す鮮やかな赤や黄色が映えていた。

富丘八幡神社は丘の上にあり、社殿までは海側の景色を眺めながら200段以上の石段を徒歩で上る以外に、山側の車道から車で行くことも出来る。社殿から見下ろすと、本殿・絵馬殿(門)・参道・海・対岸の高松市までが見事に一直線に

視界に収まり、正にこの眺望を堪能するために設計されたのであろう気迫を感じる神社の造りとなっている。

参道の途中の展望台には「覧魚崎」という名前がついており、参拝者はここからの絶景に思わず足を止めて瀬戸内ならではの多島海を鳥瞰する。

その覧魚崎のほど近くに海を見据えて「若潮の塔」が建っている。



若潮の塔

二 概要

① 場所

香川県小豆郡土庄町淵崎甲2421

富丘八幡神社内 若潮の塔

② 英霊

陸軍船舶特別幹部候補生(若潮部隊)及び戦没者英霊

千四百七柱が祀られている

③ 時間

慰霊祭 11時～11時20分

来賓挨拶 11時20分～11時35分

④ 参列者

若潮の塔奉賛会会員、御遺族、来賓者等の計25名。

コロナ禍で来島が難しく、今回は初めて若潮会(元隊員)からの参列者がいない年となった

⑤ 主催

部隊関係者が高齢化する中、部隊があった湊崎地区の自治会や有志でつくる「若潮の塔奉賛会」が支えている

⑥ 執行

富丘八幡神社 三木孝男宮司

⑦ 式次第

- 一 修祓の儀
- 二 降神の儀
- 三 献饌の儀
- 四 祝詞奏上
- 五 玉串奉奠
- 六 撤饌の儀
- 七 昇神の儀



慰霊祭を執行する三木宮司

⑧直会の中止

本来なら式典を終えたら直会会場へ向かうところだが、今回はコロナ感染対策として急遽直会の取り止めが決定された。そのため引き続き若潮の塔の前に於いて、来賓者数名からの挨拶を行った。

⑨来賓挨拶

三枝邦彦土庄町長

「慰霊祭を支える皆様に感謝。戦後75年。二度と戦争の無い時代になるように」

谷久浩一香川県会議員

「日本、家族を思い散華された皆様のお陰で日本が発展した事を語り継ぐ」

浜野良一土庄町議会議長

「戦争が起こらないように解決することを後世に誓う」

若潮会ご遺族代表 杉田健司氏

「伝承する人が少なくなり寂しい。当

時の若者を後世に伝えるために慰霊祭の継続を」

特攻隊戦没者慰霊顕彰会評議員高松真希  
「若潮部隊の中溝二郎氏が当顕彰会の会報に記事を連載して下さっている。史実を記録する重要性」

⑩取材

会場の隅にテレビカメラが入り、若潮部隊やマルレに興味を持たれたテレビ局と新聞社の方々がそれぞれ慰霊祭の取材をされた。

三 若潮部隊と若潮の塔

若潮部隊とは、陸軍船舶特別幹部候補生隊の通称。昭和19年、旧陸軍は悪化する戦局の打開策にと「陸軍船舶特別幹部候補生隊」として15歳から19歳の約8千人の少年を志願で募り、小豆島と小豆島からほど近い豊島で水上特攻の基礎訓練を行った。

その後隊員らは昭和19年9月から順次、広島県・江田島町で実戦訓練を受け、第一期生(1980名)は250Kgの爆雷を搭載したベニヤ板製モーターボート(通称マルレ)で敵船舶に体当たりする水上特攻の要員として、台湾・フィリピン・沖縄方面に出撃し1147名が戦死した。

尚、第2〜4期生の隊員は原爆投下直後の広島で過酷な救援活動にあたり、複数

が被爆した。また西宮、福山では訓練中の隊員が空襲をうけ、犠牲者が出た。

若潮の塔は昭和48年11月23日に富丘八幡神社の海が見える一面に若潮会により建立された(慰霊祭が毎年11月23日に営まれていたのはこのためである)。

塔の周りには、入隊時・訓練時・出征前の3人の青年をかたどり作られた「陸軍船舶特幹生の像」や、フィリピンの川底から近年発見されご遺骨の代わりにと引き揚げられたマルレのエンジン等も安置されている。今でもまだ燃えているような生々しさを覚える、焼け焦げたエンジンである。



引き揚げられ展示されているエンジン



〔陸軍船舶特別幹部候補生隊やマルレ艇に關しては、若潮部隊1期生の中溝二郎氏が当会報に平成30年5月号より毎号記事を投稿してくださいとありますので、詳しくはそちらをご覧ください。当顕彰会のサイトの『会報バックナンバー』にアクセスして頂くと、記事を閲覧できます。〕

#### 四 小豆島と富丘八幡神社

瀬戸内海に浮かぶ小豆島は連絡橋の無い完全なる離島で、全国で最も多い六つの港・十の航路を有している。よって入島するには高松港・姫路港などからフェリーで渡ることとなる。島の周囲は約126 Kmあり、その面積は瀬戸内海の中では淡路島に次ぎ2番目の大きさを誇る。小豆島の形はよく牛になぞらえられる。西に頭を東にお尻を向けて牛が立った形に似ているのだ。この牛のちょうど喉の

辺りが湊崎で、現在も小豆島の商業・交通の要所となっている。若潮部隊の訓練所兼宿舎は当時この湊崎にあった。

その、牛の喉から頬の部分を上下に小豆島は本島と前島の二つに分かれていて、地図を見る限りそれはまるで牛が頭絡（牛の顔に巻いた綱）をしているように見えるのか、ここがギネス認定もされている『世界一幅の狭い海峡』土湊海峡

である。先ほど申し上げたように、当時若潮部隊の基地は湊崎にあったので、土湊海峡は若潮部隊の交通・訓練の経路ともなっていた。

富丘八幡神社もまた湊崎にある。土湊海峡からは1・7 kmの、海も町も見渡せる風光明媚な高台に位置しており、「讚岐十景」にも選定されている。祭神は八幡神すなわち武運の神である。

富丘八幡神社本殿裏の頂上から東南方向に下る稜線上に、小豆島で最大規模の古墳群がある。実は神社にある頂上墳は昭和20年3月、そこに高射砲を設置しようとした若潮部隊によって発見されたそう。人骨や埋葬品が発掘されたことからこの場所への高射砲設置計画が中止となったエピソードを、富丘八幡神社の三木宮司から伺った。

#### 五、所見

コロナ禍、注意を払いながらの慰霊祭催行となりました。直会が中止になり交流の機会は得られなかったものの、丹生会長を筆頭に「若潮の塔奉賛会」の皆様、皆様の結束の固さ、慰霊祭を力強く支える姿を短時間のうちに何度も目にしました。

例えばこんな事がありました。閉式の辞の後に、若潮の塔奉賛会のお一人が若

潮の塔に語りかけるように「若潮部隊に歌を一曲歌おうよ！」と塔碑の前に出て来られました。その方が伴奏無しで大きな声で若鷺の歌を歌い始めると、その声に合わせてすぐに皆も歌いはじめて海にまで響くような大合唱となりました。

若潮の塔奉賛会は、地元の自治会と有志で結成された会です。当時小豆島で秘密裏に訓練を受けた若潮部隊の隊員達は、戦時下（生き残った隊員はその後も）小豆島を第二の故郷と口々に言っていたそうです。奉賛会の方が「だから慰霊祭はここで絶対に続けてあげたいと思っています」と話してくださいました。

また、三木宮司は当顕彰会のために若潮部隊に關する貴重な本や資料を快く貸してください、富丘八幡神社や小豆島について沢山のことを時間を割いてご教授くださいました。

私はまだ駆け出しの評議員で、お恥ずかしながら特攻の全てに關し勉強不足です。しかしこうして頂いた得難い機会を決して無駄にせず、精励恪勤致す所存です。今回お世話になりました小豆島の皆様、誠に有難うございました。

最後に、若潮の塔慰霊祭に携わる皆様のご尽力に、格別の敬意を表します。



告白

理事 大穂 その井

この原稿を書くにあたり、自分の中で強い葛藤があった。それは、自分自身が「特攻」と向き合う勇気をいまだに持てていないということの表れだった。おとなになっても、まだ気持ちにはあの場所にある。そしてそれには祖父が大きく関与している。

私は幼少の頃から、祖母や両親に連れられて特攻隊戦没者のご慰霊に上がり、たくさんの方々にお目にかかった。そして数年前、80代になった母の代わりにこの財団の理事となった。そんな私が、実は特攻と向き合えないままにいることを公表するのは果たして良いのか、逡巡しつつもここに初めて告白する。

あの日のできごととは鮮明に覚えている。まだ小さかった私が、父に手を引かれて靖國神社に参拝に上がった時、宮司さんが「よくいらしたね」と申され、その場所におおされた。入った瞬間、光に目がくらんだことを今でもよく覚えている。部屋の中には花嫁人形がたくさん飾られ

ていた。日本髪を結い上げた美しい人形たちは、豪華な花嫁衣裳や純白の白無垢を着て、ずらりと、静かに並んでいた。

父が「これは死んでしまった若い兵隊さんたちのお嫁さんだよ」と言い、私はその意味がわからないまま、黙って人形を見て回った。

いつも遊んでいるビニールでできたりリカちゃん人形とはあきらかに違うが、また、床の間に飾ってあるたおやかな博多人形とも違う。

まるで「人」みたい、「生きているみたい」そう思った。

それから数年後、靖國に上がった時に、私から「あのきれいな花嫁人形を見たい」と申し出て、部屋におおしていただいた。美しい花嫁たちが変わらずそこに立っているのを見て、私は嬉しくなり「また来ました」と挨拶をした。



靖國神社の花嫁人形(※1)

父が「こちらにおいて」と言い、壁に飾られた特攻隊員の写真を指差した。

「あの兵隊さんたちはお嫁さんをもらわないで死んでしまったから、兵隊さんのお母さんがお人形さんを天国に送ったんだよ」と言い、「兵隊さんの写真をよく見てごらん」と私を促した。

まだ少年の顔をした兵隊さんたちは、花嫁人形と向き合うように壁に並んでいた。

すると、視界が急に乱れて、目の前にこんな映像が見えた。

短髪の青年の横に、髪をゆるくカールした綺麗な女性が寄り添っていて、ふたりとも私を見て笑っていた。目線が同じ位置だったので、子どもだった私の目線まで下りて現れてくれたのだと思う。

驚いて父にそれを告げると「そうか。それは良かった」と笑ってくれた。

花嫁人形には「明子さん」などとそれぞれに名前が付けられていて、

「○雄へ 母より」と書いた短冊が添えられていた。

中でも一番大きなガラスケースに入った美貌の花嫁人形には「弟へ メイ牛山」と書かれた大きな札が付いていた。

こども心に「なんで牛なのにメイ？ヤギなんだろう」と不思議に思った。

十年後、ハリウッド化粧品創業者であるメイ牛山さんにお目にかかった時、このことをお伝えしたら「そう！見てくれたのね！」と私の手を握り、「私はね、弟の分まで生きているのよ。だからほら見て、元気でしよう？」と申された。私は話すことを迷ったが、でも思い切つて、あの靖國の部屋で目の前に現れた若夫婦のことをメイさんにお伝えした。するとほらはらとお泣きになつて「お嬢ちゃん、ありがとう」と申され、私をそつと抱きしめて下さった。

成長して、私の祖父が最後の連合艦隊司令長官だったことを知った。祖父は私が3歳の時に亡くなったが、そのあと自宅には陸軍海軍を問わず、たくさんの方が訪問くださり、祖母や両親



祖父 小澤治三郎



山下奉文陸軍大将と祖父 (※2)

と交流していた。

祖父は尊敬する立派な軍人さん、そう思っていた。

そのうち、祖父が特攻隊に出撃命令を出していたことを知った。終戦前の激戦の時、たくさんの特攻隊員が亡くなられた時に、だ。

私はあの花嫁人形たちを想った。

娘である母は、40年近く中学校の教員をしていたが、自分の父のことは語らず、黙っていた。

祖父の葬儀の日に、事実を知った母の教

員仲間が「仰天した」とあとで話してくれた。私がおとなになるにつれ、母は「ご遺族のお気持ちを考えて、戦争に関する発言は控えなさい」と何度も言った。私は、母に言い含められたこともあり、祖父のことも連合艦隊のことも、戦争のことに触れないように気を付けながら生きていた。

30代で私がベンチャー会社を起業し、考案した技術がニュース報道されると、連合艦隊で祖父の参謀をして下さっていた瀬島龍三さん(※3)が「私が君のビジネスの後見人、参謀になるよ」とおっしゃり、取締役になり、株主にもなって下さった。

瀬島さんは「小澤長官のことについて君は知らなさ過ぎるな。もっと勉強をしなさい」と申され、私はそれから瀬島さんに祖父の話をしつづつ聞くことになる。

ある日、瀬島事務所に上がると「私がお長をしてしている特攻協会へ出した本だよ」と瀬島さんから「特攻隊遺詠集」を手渡された(※4)

ページをめくり、初めに目にした辞世の歌は

『十億万人に十億の母はあれど 我が母に勝る母あらめやも』だった。それは19歳の少年が詠み、昭和20年6月25日に

散華されていた。祖父が出撃に関わっていた日付だ。

私は瀬島さんの前で「涙を拭きなさい」とハンカチを渡された。

本には、家族を想う20歳の隊員の歌

『泣くな、嘆くな、必ず還る 桐の小箱に錦つけ会いに来てくれ九段坂』

24才の息子を亡くしたお母さまの歌  
『散る花のいさぎよきをばめでつつも母のこころはかなしかりけり』

も載っていた。

あの花嫁人形たちにこめられた想いがそこにあった。

私はこの寄稿をするにあたり、あの花嫁人形たちが今どうしているのかを靖國神社に尋ねた。

遊就館に飾ってある数体を除いて、すべて倉庫に保管しているとの答えに、息が詰まりそうになっている。

「遺族がお参りに来る時に見せていたけれど、もうその機会が減った」のが理由であったが、暗い部屋にひっそりとたたく花嫁たちを想うと心が苦しい。

できれば、昔のように明るいあの場所で、たぐさんの方々にその姿を見せて欲しい。

あの花嫁人形を見れば、たとえ子どもであろうとも強く記憶に残る。



祖父母と筆者。(※5)

祖父はこの年の立冬に亡くなった。

(※2) 山下奉文陸軍大将を訪問した祖父。当時は南遣艦隊司令長官だった。シンガポールにて。昭和17年2月27日。

(※3) 瀬島龍二氏 陸軍中佐、陸士44期、連合艦隊参謀。戦後は伊藤忠商事会長、NIT相談役、中曽根政権顧問などの要職を歴任され「昭和の参謀」と称された。平成4年当財団の会長に就任。平成19年9月、逝去。

(※4) 「特攻隊遺詠集」(財)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編 1999年PHP研究所

(※5) 「果敢、寡黙にして情あり 最後の連合艦隊司令長官小澤治三郎の生涯」宮野澄著 1994年桂文社

※ 掲載した遺詠

『十億万人に十億の母はあれど我が母に勝る母あらめやも』

海軍2飛曹 高口一雄命 享年19歳 昭和20年6月25日歿

海軍乙種特別飛行予科練習生4期(乙特飛4期) 琴平水心

隊 零式観測機に搭乗 指宿基地発進 沖縄周辺艦船にて

戦死 富山県出身

『泣くな、嘆くな、必ず還る 桐の小箱に錦つけ会いに来てくれ九段坂』

陸軍伍長 庄地畑道義命 享年21歳 昭和20年1月9日歿

陸軍特別幹部候補生1期(特幹1期) 第12戦隊 海上特攻

フィリピン島リンガエン湾にて戦死 徳島県出身

『散る花のいさぎよきをばめでつつも母のこころはかなしかりけり』

海軍中尉 緒方襄命の(母)蜜様

享年24歳 昭和20年3月21日歿

関西大学予備生13期 第1神雷桜花隊 桜花に搭乗 鹿

屋基地発進 鹿屋160度360度の敵機動部隊に突撃し

戦死 熊本県出身

(※1) 花嫁人形の画像は、2012年2月号「WILL」に故三宅久之氏が寄稿された「英霊の花嫁」からお借りした。発行：ワック(株)



## 桶川飛行学校跡研修報告

評議員 原 知崇

令和二年十月三十一日、埼玉県特攻勇士の像慰霊祭閉式後に実施された、桶川飛行学校跡研修に参加してまいりましたのでご報告致します。

## 〔経緯〕

発足時は熊谷陸軍飛行学校桶川分教場といい、昭和十年に開校した熊谷陸軍飛行学校隷下の数ある分校の一つとして昭和十二年に開校、近傍の荒川河川敷に川田谷飛行場を擁し、以来特別操縦見習士官や少年飛行兵といった操縦者の学び舎として使用されてきました。被教育者は延べ一五〇〇名とも一六〇〇名ともいわれ、前期の訓練は九五式中間練習機、後期の訓練では九九式高等練習機などが使用され、ここでの訓練を卒えると実用機課程に進んでいきました。

しかし熊谷陸軍飛行学校は昭和二十年二月に第五十二航空師団に編成され閉鎖、桶川分教場は特別攻撃隊の訓練基地に転用され、四月五日には同地より特別攻撃隊第七九振武隊十二名が出撃基地である知覧に向けて出発しました。これは九九式高等練習機を使用した部隊で、經由地を経て四月七日に知覧に進出、沖縄より米艦隊を排撃することを目的とした大規

模攻撃である菊水三号作戦の一環として、隊長山田信義少尉以下十名が十六日に沖縄方面に出撃し散華されました。練習機での特攻隊編成は、陸軍では初めての事だったとされています。

戦後の桶川分教場は平成十九年まで、長きにわたり「若宮寮」として引揚者のための市営住宅となっており、昭和三十一年頃には六十四世帯三百名ほどが暮らしていましたが、市営住宅としての役割を終えてからは残存諸施設も解体撤去される予定でしたが、NPO法人旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会の活動による施設の保存を求める一万四千筆にも及ぶ署名を受け、桶川市は平成二十二年から保存の方針を定めました。平成二十七年には特攻隊戦没者慰霊顕彰会でも臼田智子理事の呼びかけで研修見学が実施されました。この時点では老朽化著しく、軒は落ちガラスは割れ、壁板は剥がれ、補強材によつて辛うじて建物としての姿を保っているというような状況でしたが、すでにこの頃は建物について各種の調査が始まっていた段階で、翌平成二十八年に建物が桶川市の文化財として指定され、守衛棟、車庫棟、兵舎棟、便所棟、弾薬庫の五棟について、若宮寮時代に付加されたものは取り払い、昭和十八年当時に復するという方針のもと、平成三十年から

二年をかけて復元整備工事が実施されることになりました。この工事の実施については、費用として一般からの寄付も多く集められ、「ふるさと納税」の対象ともなり話題を集めました。

## 〔研修〕

分教場建物群の復元整備工事を終え、プレオープンを経て本年八月四日に「桶川飛行学校平和祈念館」は、平和を発信し、平和を尊重する社会の実現、および地域の振興に寄与するための施設として開館しました。

祈念館に続く小径脇の民家の敷地には、陸軍標石（境界標）がいくつも確認できます。コンクリート造の円形防火水槽などもあり、敷地の外からすでに遺構が始まっています。正門に近づくると左手にコンクリート造の弾薬庫があり、屋根を木造とする事で火災の際には屋根のみが吹き飛ばす構造とのこと。小さいのに驚きますが他の保存建築物同様、開校当初からこのこと、実施部隊ではないのでこのようなものなのでしょう。門を通ると衛兵所（守衛棟とされる）があり、綺麗に整備された雰囲気は厳しく、当時の雰囲気もかくやと思えます。右手には大きな車庫棟があり、整備のために車輻の下に入るピットが再現されていたり、建物の構造について細かい展示がされて

いました。この建物の前で一行は小野桶川市長のご挨拶をいただき、爾後は二班に別れて係りの方に引率いただき、施設の解説を受けました。

桶川分教場の保存建物群は陸軍の建築規定（陸軍建築設計要領）に則って建築されていることから、陸軍の各種建築を研究する上でも貴重な史料であること、これは屋根には不燃材料のスレートを用いることや天井の高さや窓からの採光なども規定されていること。度量衡法の過渡期にあたることと、突貫工事で建設が進められたことから、陸軍のメートル法と、大工の使う尺貫法が混在し、高さについては尺貫法が、平面についてはメートル法が使われていたこと。分教場の敷地は規模拡大に伴って何度か買い増しされているが、建物も増築を繰り返しており、開校当初の正規の作りと、戦時中の増築部分を比較すると、後者は陸軍の建築規定にある金具が使われなくなるなど、品質低下が確認できる等のご説明に、陸軍航空遺構ではありながら、建物の構造という側面からも様々な情報を伝えていることに大変感心しました。

物も少なくなく、外観写真からだけではわからない部分も数多くあり、保存が叶わないにしても解体前に見学会などの機会を設けることは有意義と思います。本館にあたる、兵舎棟の中には分教場と戦争期の歴史的背景、分教場での生活、寝室、卒業生の戦争、戦後の状況というような展示がなされていました。兵舎棟はセンスよく整備され、もちろん現代では不可能な部分もありますが、照明や材料なども、当時の雰囲気なるべく伝えようという意思が強く見られます。パネル展示は貴重な写真が多く、それらを使って状況をわかりやすく説明しており、特に特攻隊についての解説は、桶川分教場で教官をされていた第二十三振武隊長伍井芳夫中佐、前述の第七十九振武隊、そして終戦後に特攻を命ぜられるも出撃が中止となった山田孝准尉について資料を伴って展示がなされています。今回の研修でも、多くの方がそこに目を留め、時間を割いておられる印象でした。各種展示品の中には日本軍以外のものや戦後のものが混じっていたり、わかりやすさを優先したためか用語の間違いや、外部の有識者を交えて、いままじ精査する必要があるものもあるのではないかと感じました。しかし講演会、学習等

に使うことができる部屋も整備されており、今後さまざまな行事や、イベントに使用していくには大変よい環境が整ったという印象です。今後の活用と、引き続きの整備が期待されます。

なお、桶川分教場の訓練用飛行場であった川田谷飛行場はホンダエアポートとして、現在でも軽飛行機用の飛行場として使用されています。ご見学の際には、あわせてこちらも遠望されてはいかがでしょうか。

桶川飛行学校平和祈念館  
開館時間

午前九時～午後四時三十分

休館日

月曜日（祝日の場合はその翌日休館）

毎月末日（日曜日の場合は開館）

年末年始（十二月二十七日～一月五日）

その他 特別整理期間等

入館料 無料

駐車場 あり

住所

〒363-0027

埼玉県桶川市大字川田谷2335番地の

16

電話 048-778-8512

E-mail: hikogakko@city.okegawa.lg.jp

航空自衛隊百里基地（百里原海軍航空隊）  
 研修に参加して

評議員 及川 昌彦

令和二年十一月二十七日金曜、航空自衛隊百里基地を研修しました。百里基地は百里原海軍航空隊の後に建設されたもので、基地内には基地の歴史や任務・活動を学習することが出来る広報館と各種慰霊碑等を集めた雄飛園があります。

研修に先立ち、岩崎副理事長・福江理事・石井専務理事が石村尚久基地司令（防大31期）を尊敬し応接室にて最新版の特攻全史とミニ特攻像を贈呈しました。

百里原海軍航空隊は昭和十三年、練習機の教育航空隊として発足し、昭和十六年以降は実用機の操縦員、偵察員の教育が開始されて昭和二十年三月に沖縄戦が始まると教育に使用中の飛行機三十五機が九州から出撃し八十五名の隊員が沖縄の海底に散華しました。

雄飛園には任務中に殉職した百里基地の隊員の御霊を鎮魂し、不幸な事故が起きないことを祈念して建立された「雄魂の碑」があり、私たちはまずそこに参拝し、次に、特別攻撃隊を含む旧海軍で亡くなられた方々を慰霊する「百里原海軍航空隊慰霊碑」に参拝しました。

この慰霊碑は、昭和五十一年に百里原海軍航空隊有志によって建立され慰霊碑

の下には戦死者名簿が埋められています。平成二十年には特攻隊に関する碑が同じ場所に設置されています。

私たちが研修に伺ったときは、F4ファントムがこの年限りで勇退する時期で、基地内の見学時に、そのF4ファントムも見学することが出来ました。また、基地所在の航空機も見学することができ、航空自衛隊の活動を肌で感じることで、有意義な研修でした。

このコロナ禍とF4勇退で多忙の中、対応していたいただいた石村司令以下百里基地の隊員の方々に感謝します。



百里基地殉職隊員を祀る「雄飛の碑」



広報館内の碑の解説文



百里原海軍航空隊慰霊碑



第一八戦隊及び基地第一八大隊戦闘経過

会 員 中 溝 二 郎

海上挺進第一八戦隊は、昭和十九年九月から幸ノ浦基地で訓練に入り、十月十五日に正式に宇品で編成を行なった。

隊号は暁第一九七五七部隊と称し、戦隊長は陸士五三期の若林一大尉で、第一中隊長は向田貞一中尉、第二中隊長は辻義路中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長久保三郎少尉（陸士五七期）、本部付として渋谷信平見習士官（幹候一期 二〇年一月少尉）がおり、群長は豊浜の船舶幹候隊第一期の見習士官、隊員は特幹一期生（十九年十一月伍長）であった。

隊員は宇品から輸送船大国丸に乗船して出航したが、門司港で他の輸送船に分乗することになり、ここで十二隻の船団編成を行ない、十一月三日に出航した。戦隊は六隻の輸送船に分乗したが、その乗船区分に統一性が見られず、何故か混然としていたようである。辰昭丸・鳴尾丸等の船腹が小さく他の僚船もそのような傾向があり、輸送船一隻に積載される①の数が少数に限定されたため、戦隊員も各①の積載された輸送船に分乗したのが理由であろうと思われる。

即ち、第一中隊主力（第三中隊及び第二中隊の一部を含む）は辰昭丸及び鳴尾丸、第三中隊は鎮海丸、第二中隊は福洋丸（第一中隊の一部を含む）、戦隊本部は仁洋丸（第一中隊及び第三中隊の一部を含む）、第一九戦隊の一部も乗船していた（その他白馬丸にも乗船していたようである）。

この頃の船団は主に朝鮮沖から東支那海を南下するコースをとっていたが、十二日に朝鮮の沖合の東支那海で早くも米軍潜水艦の魚雷攻撃を受け、当初鳴尾丸を引き続いて辰昭丸が雷撃を受けた。

「戦時輸送船団史 昭和六十二年 駒宮 真七郎著」に記載されている状況の



うち関係部分についての要旨は次のとおりである。（船団名 モマ〇七）

「十二日〇四・二〇、北緯三一度三〇分東経一二五度五七分（長崎南西四〇〇km附近）において鳴尾丸が被雷した。鳴尾丸（四、八二三総トン）は魚雷命中の大爆発後瞬時に沈没という経過をたどり、このため数名が海上に吹き飛ばされた以外は、全員船と運命を共にするといった最後を遂げた。

当時本船が搭載していた人員は海上挺進第一八戦隊、南方軍経理部候補生等約四百九十名で、遭難による戦死は船員七十二名、船砲隊一〇一名を含め約六六〇名を数え、正に玉碎であった。

続いて二時間後の〇六・二〇、北緯三一度四六分東経一二五度四〇分（男女群島西方二八〇km附近）において辰昭丸（二、七四六総トン）が雷撃を受けた。

右側方から発射された三本の魚雷が二番船倉に命中、大爆発とともに船体が大傾斜し、そのままの姿勢で轟沈した。本船には海上挺進第一八戦隊、南方軍経理部候補生、朝鮮第一九師団の一部等が乗船していたが、遭難により乗船者一二五名、船員六十五名、計一九〇名が戦死した。この両船に乗船していた第一八戦隊第一中隊長向田中尉、第二群長吉富・第二



中隊第二群長安食及び森田（戦隊本部直轄群長か）各見習士官以下乗船隊員のほとんどである三十七名が戦死した。（この時救助されたのは第二中隊第一群長の寺田馨見習士官一名で左足下腿部切断の重傷を受けながら、幸運にも救助され、上海の陸軍病院に收容された後内地に転院し、二十一年六月十四日相模原陸軍病院から退院召集解除になった）

門司を出た船団のうち、第三中隊の乗船した鎮海丸は、出航後エンジンの故障が起つたため、六日に門司に帰港したので、一時は難を免れたが、十五日に改めて第一九戦隊の乗船している江戸川丸等と共に出航したところ、十七日夜半に濟州島沖で米軍潜水艦の攻撃を受け、僚船の盛祥丸、江戸川丸、逢坂山丸等が相繼いで雷撃により沈没した。鎮海丸は一旦

退避したが遭難現場に引き返し漂流者の救助に当たつたが、救助作業がほぼ終了した頃に魚雷二発を受けて沈没し、第三中隊は救助された者達と共に海上に退避したが、一名が海上で戦死したほか中隊長久保少尉及び、柴田善弘・倉井則雄見習士官以下この時乗船していた十五名は、辛うじて海軍艦艇に救助された。（この時江戸川丸に乗船していた一九戦隊長以下四十四名が海没戦死した。）以後この中隊は、上海に廻航された後、呉淞―南京―浦口―釜山を経由、十二月二十五日に広島に帰り着いた。その後、第二〇戦隊の海没者の補充のため、二十年一月六日同戦隊に転属命令を受け、以後第二〇戦隊第三中隊として行動を共にした。第二〇戦隊に編入後、二十年一月三十一日門司出発、二月六日基隆着。二月十七日

目の十二月六日夜から翌七日にかけて、バシー海峡で魚雷攻撃を受けた。前掲の「戦時輸送船団史」によればその要旨は次のとおりである。（船団名 タマ三四）  
「十二月六日二一・四七、バブヤン群島ダルビリ島西方五五km附近に達したとき、まず仁洋丸（六、八六二総トン）が右舷三番船倉と右舷四番船倉に被雷して火災が発生し、船内には両破孔からの浸水で早くも総員退船が発令された。船体は刻々沈下を続け、二二・一〇に全没した。本船には海上挺進第一八戦隊、同第一九戦隊他一五〇三名が乗船していたが、遭難により船員を含め一四三〇名が戦死した。多数戦死の原因は被雷による船内死亡と、当時海上が大時化で、強風と激浪がさかまく洋上に脱出したため、波にのまれ海没したのが主たるものであった。

台湾軍に編入となり、嘉義の西方台南州東石郡港（朴子の西方四km）に展開することとなった。なお、幸ノ浦又は台湾にて下士官二名及び特幹二名の補充があつた。  
第二中隊（主として福洋丸に乗船）、戦隊本部（主として仁洋丸に乗船）の乗船した各輸送船は、この時は難を免れ一路南下して高雄港に寄港し、ここで船団を再編成して出航したが、三日

三総トン）が北緯一八度五二分東経一二〇度五七分（ダルビリ島西南西二五km附近）において被雷した。三発の魚雷が二番船倉、中央機関室、船尾に命中し、大爆発と共に瞬時に沈没した。その頃乗船者は豪雨の到来で全員船内におり、爆発時停電となり大混乱を極めた。当時本船には海上挺進第一八戦隊、南方軍関係幹部候補生、山砲七一連隊、野戦高射砲第

三四大隊等九二一名が乗船していたが、ほとんどの者が戦死した。」となっている。

この時第一八戦隊で海没戦死した者は三十八名となっているが、それぞれの乗船区分は明確ではない。戦死者名簿（留守家族名簿）によれば福洋丸に乗船していた者は第二中隊長辻中尉以下十八名（十二月五日戦死）、仁洋丸は第一中隊長三群長山田見習士官以下三名（六日戦死）白馬丸一名（七日戦死）又、単にバシー海峡とのみ記載されている者は第二中隊長三群長片寄見習士官以下十三名（うち十一名は五日、二名は六日戦死）又、ダルピリー島西方海面戦死（六日）三名となっている。

これらの十六名もいずれかの輸送船に乗船していた筈である。又、白馬丸については最初門司を出港した際の船団（船団名モマ〇七）中にはその名前が見られるが、高雄にて再編成し、福洋丸と共にルソンに向かった船団（船団名タマ三四）中にはその名前が記載されていない。

（基地大隊の項に、整備中隊の十名が白馬丸に乗船してマニラに着いたと報告されている）

この時救助された者はその後全員戦死しているため、確定した資料がないので、乗船区分と戦死日付は共に疑問が残る。

この遭難で第二中隊はほとんど全滅し、本部及び第一中隊で救助された生存者は、若林戦隊長、渋谷少尉と柴沼、栗山の各

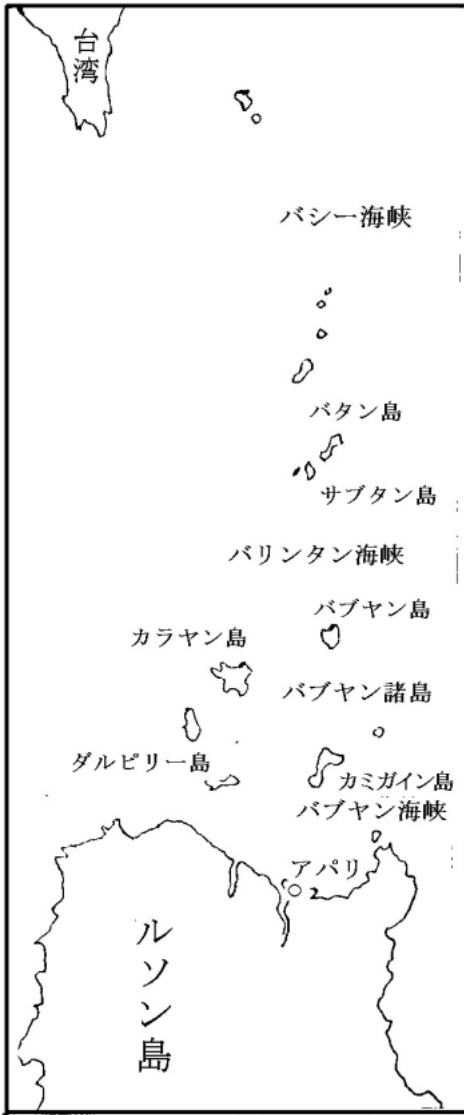
見習士官を含め合計一〇名であった。（その内二名はルソン島リンガエン湾において戦死）

これらは、十二月中旬にマニラに到着上陸し、本来は他戦隊と同じくルソン島南部が予定されていたのだが、この遭難により舟艇は全部失われたため、戦隊長以下は第一七戦隊と行動を共にすることとなった。

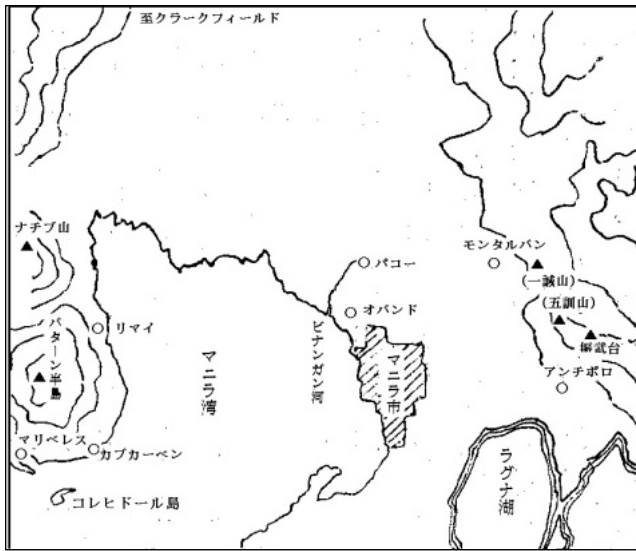
昭和二十年一月九日にリンガエンに上陸し、マニラを目指して南下する米軍戦車兵団の接近に伴い、オバンド地区でも第一七戦隊基地大隊を主軸として戦闘状態に入り、主として第一七戦隊長の指揮下に陸上戦闘を展開していたが、特に二月十一日から十二日にかけて、米軍と激戦を行ない、戦隊の渋谷少尉、柴沼、栗山の見習士官等は、米軍迫撃砲陣地に突撃を敢行し、その一部を破壊したが、合計六名の隊員がここで戦死した。（若干名が生存した可能性がある）

第一七戦隊長富田博少佐（陸士五二期）は、同戦隊の副官江口鉄雄少尉と鶴田徹見習士官（幹候一期）以下の戦隊本部直轄群及び石橋幸夫少尉（陸士五七期）以下の第三中隊を舟艇と共に若林戦隊長の指揮下に入れた。

こうして米軍の本格的な進攻が迫った







ので、舟艇の温存を図り、後日の出撃攻撃に備えるため、舟艇航行でマニラ湾を横断し、バターン半島に移動することとなり、残存隊員及び第一七戦隊員は、二月十一日ビナンガン河口に舟艇を浮べ、バターン半島のリマイに向かった。

第一七戦隊第三中隊の相当数はビナンガン河口において出発に遅れ、干潮のため舟艇の身動きがとれず河口に取り残され、米軍の砲爆撃によりここで戦死した。この時第一八戦隊の一部の隊員もこれに含まれていたかも知れない。

リマイに到着した戦隊長はそこからコレヒドールに渡ろうとして、単身筏で出発したが、以後の消息は不明である。

他の者は第一七戦隊員とともにナチブ山に入り、その後五月になって北部のバギオへの突破を試み、北上する途中クラークフィールド付近において戦死した。(二〇年六月、比島パンガ州クラークで戦死一名がある)

結局、この地域からの第一八戦隊の生還者が一人もなく、第一七戦隊の生還者による状況報告のみであったと思われる為、戦死者等の詳細は不明である。

同隊の戦死者は、前記のようにほとんどは海没であるが、将校十一名、特幹七十三名、下士官二名の合計八十七名であった。

海上挺進基地第一八大隊は、暁第六六八〇部隊と称し、昭和十九年九月十八日に金沢市で大隊長大迫亀美男大尉の下に、中隊長中島庄司中尉、小隊長浅倉徳太郎少尉等で編成を行なった。

十月四日宇品を出航してから伊万里に廻航し、八日に本隊(大隊本部、第一、第二、第三の各中隊と整備中隊の一部)は、同港を出航して二十三日に高雄に到着し、二十四日に他の輸送船と船団を編成し高雄港を出航したが、船団は二十六

日夜バシー海峡で、米潜水艦の魚雷攻撃を受け、船団の大半が沈没する被害があり、その際この大隊の乗った輸送船も沈没し、隊員の五〇名が海上戦死した。

救助されたその他の者は、十月三十日マニラに到着上陸し、同地で部隊の整理と後発隊員の集結に努めていた。

整備中隊の主力は、戦隊員とともに六隻の輸送船に分乗して、十一月四日門司港を出航したが、十二日夜済州島沖で米潜水艦の魚雷攻撃を受け、一部が乗船していた辰昭丸がまず沈没続いて一部が乗船している鳴尾丸も沈没し、更に機関故障のため遅れて再出航してきた鎮海丸にも、一部が乗っていたが、これも十一月十七日に東支那海で沈没するという惨憺な状況になり、僅かに白馬丸に乗船していた斎藤大尉以下一〇名だけが、マニラに上陸できたに止まった。(南部ルソンのマルブニヨ山附近に於いて第一九戦隊員や同基地大隊員等と行動を共にしていたとの報告がある)

また更に後の船団に乗船した整備中隊の一部は、戦隊員の乗っていた仁洋丸、福洋丸であったため、これも前記のようにバシー海峡で、十二月五、六日にかけて海没し、ほとんど全滅した。

こうして大隊は、整備中隊を除き、一

応集結が終つたので、十二月一日マニラを發つて任務地のバタンガス州に向つたが、数次の海没により兵員は減耗してゐたので、十二月十四日基地第一五大隊に配属されることになり、バタンガスを出発して同州のパリコーに着いた。

更に奥地方面に陸上戦闘用陣地設定を命ぜられて、パリコーからアガに移動し、ここで対戦車用の陣地構築を行なつてゐた。

昭和二十年に入り、一月二十日に至つて、更にリサル州モンタルバン（マニラ市の北東）に移動の命令を受け、同地到着後は河島兵団の指揮下に入る事になった。

二月中旬マニラ周辺では、米軍との戦闘が激しくなつたので、更に移動して逐次戦闘に加わつた。

以後八月までの間には、振武集団の陣地区で、通称五訓山（モンタルバン南東）、一設山（または一誠山、同じくモンタルバン付近）扶容振武台四〇〇高地（五訓山の更に東部奥地）等に転戦しており、八月の敗戦時には、モンタルバン、レオミデス奥地付近に分散してゐた。

同大隊の戦死は、総員九二八名中九〇七名に達し、生還者は正確ではないが、僅かに二十一名といわれている。

オバンド・パコの戦闘

（戦友の冥福を祈りながら）

元第十七戦隊長幹候十一期 鶴田 徹

（事務局より 第十八戦隊は戦闘に参加した隊員が全員戦没されておられますが、第十八戦隊員が戦つたオバンド・パコの戦闘状況について、第十七戦隊の鶴田氏が一期生会報に報告されておられますので、その要旨をここに掲載致します。）

昭和二〇年一月六日遂に米軍はリンガエン湾から上陸して来た。吾等海上挺進隊第一七戦隊の基地マニラ湾オバンド・

パコからは遙かに遠い北のリンガエンであつた。リンガエンはわが軍も緒戦のフィリピン攻撃の時、上陸をした処であつた。

昭和一七年には日本軍が上陸し昭和二〇年には米軍が上陸して来たのだ。そのリンガエンでは第十二戦隊が出撃して米軍輸送船団に対して多大な戦果をあげた事を聞いた。吾等も又マニラ湾にて戦果を

あげるべく必勝の信念に燃えていたが、背後から敵が来ることになり海上での戦斗を断念し陸上で戦う事になった。

万一にそなえ①はビノワガン河口の水路、岸のマングローブの中に隠し隊員は

全て斬込隊として戦う事になった。ピストルと曹長刀だけしかもつていない隊員

にとつて配布されたものは、野球のベースの様な戦車攻撃用の布団爆雷と六尺の棒の先に円錐型のセメントでかためた刺突（しとつ）爆雷であつた。数が無いので他は竹槍をつくることで竹を切つて竹槍をつくつた。「一人が一人の敵を殺せば戦隊で一〇〇人の敵を殺す事が出来る」との隊長の激励で竹槍づくりの竹を切つた純情な疑う事も知らぬ隊員であつた。

吾等の出撃の為に作業や炊事を担当してくれた基地大隊はパコの部落を離れ五キロ程北のミカワヤンの部落へ展開した。ここはマニラに入る道路の要衝であつた。

重機関銃と軽機と擲弾筒だけの基地隊が守るここへ、米軍の中でも最強の部隊があらゆる火器をもち戦車、観測機、戦闘機に守られて南下して来た。平地には友軍の戦斗部隊は既になく、残つてゐるの

は火器を持たぬ飛行場大隊と吾等海岸線に展開する海上挺進隊と基地隊だけであつた。マニラ奪回を目ざす米軍との戦力の

差は歴然たるものがあつた。大人と赤ん坊の様なそれでも日本軍として戦わねばならなかつた。兵器も無く補給もなく、

ただ自分の身体と軍人精神だけで戦わざるを得ない窮地においこまれていつたのだ。

前に米軍の戦車、空には飛行機、まわ

りの部落の原住民は米軍から武器自動小銃を与えられたゲリラとなっている。近づいて来る戦車の轟音、飛びまわる観測機、一兵も逃さじと低空で旋回する観測機の中の乗員まで見える。

①を持っていてる隊員は最後まで出撃のための②を守り、③を失ったものは夜間敵陣の斬込みにゆく事になった。

友軍の重機がなりだした。隊員の志気が上がる。米軍何するものぞ、吾に天佑神助ありと!!

然し敵の攻撃は物凄く、その轟音に重機の音などかきけされ部落から部落に走る帯の様な曳光弾、部落は瞬間の中に焔につつまれ、うらみの火柱をあげている。

④の大部分を東支那海の海没で失った一八戦隊の柴沼見習士官と会う。「お、柴沼元気か」と声をかけると「斬込に行った栗山見習士官が死んだ。俺は特幹をつけて仇討に行つて来る、あとを頼むぞ」と云い乍ら「隊長の仇をうつんだ」と涙を流している特幹をつれて轟音のとどろく前線を出発して行つた。

一八戦隊長は戦隊の為に働いてくれた基地大隊の危急を救うべく、戦う⑤を既に失っている戦隊員を次々と斬込みに出した。その晩真夜中に、聞き慣れぬ爆裂音が二回敵陣の方から聞こえて来た。あ

れは栗山等の仇を討ちに行つた柴沼や特幹の斬込隊の戦果であると思つた然し哀しいかな彼等も又誰も生還しなかつた。海上に散るかわりに陸上で立派に散つて行つたのだ。その華々しい戦いの状態を知る人は既に居ない。出撃を見送つたまであつた。

海上挺進隊員の隊員らしい戦斗はこのオバンド・パコの戦斗までであつた。

⑥を最後まで守り隠した一七戦隊はバターン半島からコレヒドールに出没する

敵を攻撃するべく二月十一日からバターン半島へ転進し、ナチブ山とマリベレス山にて転戦、五月五日からバギヨにむけて敵中突破行を計り遂に敵との戦争より生きる為の戦いに力つきてしまった。

美しい純情可憐な青少年を、斯かる悲惨な死に追いやり本人は勿論家族のものにも筆舌に尽し難い悲しみと苦しみを与えた戦争の責任は何処に誰にあるのかと今更の如く思う毎日である。

不思議に、全く不思議に生命ながらえつて今日まで戦後五〇年を生きさせて貰つたその幸福を忘れること出来ない。

当地の瑞穂山金龍寺の観音様に多くの戦友の冥福を祈念し、供養の為に毎日佛像を彫み乍ら暮らしている毎日である。

昭和五七年二月戦後慰霊の為に訪れた戦跡は水牛の遊ぶのんびりした農村風景であつた。敵の観測機と互いに睨み合つたオバンドの教会は残っていた。その鐘塔には昔の姿のまままで白いペンキだけが塗られてあつた。訪れた吾々を見ようと物めずらしそうによつて来た住民達は昔のままであり、その中から若い特幹が「やあ」と云つて笑い乍ら走り出て来る様な錯覚を覚えた。

そして最後にもう一度比島戦跡を訪ねたいと強く強く念願している毎日である。

(平成二十二年没)

凄絶” 帰つてきた

血染めの日章旗

元第十七戦隊群長幹候十一期 鶴田 徹

その日章旗との対面について御報告申し上げます。

この旗は私と同期の幹候豊浜十一期である海上挺進第十七戦隊第三中隊第三群長松野伊三太君のものです。

第三中隊はマニラ西北二十キロオバンド・パコ、ダンバリットの戦闘に於いて筆舌に尽くし難い戦闘の末、十八戦隊長の指揮下にあつて(後述)、マニラ湾を横断し、バターン半島リマイに転進し、



コレヒドール周辺に出没せる米輸送船団を攻撃のため、二月十一日ビノワガン河口を突破しようとしておりました。

河口の部落は前日の砲撃で焼き尽くされ、暗闇の中に民家の柱だけが墓場の塔婆の様に赤い火の柱となって立っていました。折から湖は夜明けから干潮の底であり、一刻も早く河口を脱出せねばならぬ時に、若林戦隊長との合流が遅れたため、艇の大部分が泥の上に干上がり、動きがとれず、三中隊の各群長と特幹は大部分艇と共に河口に残つてしまいました。米軍は戦車を中心にあらゆる火器を動員し、空には弾着を見る観測機が飛び回り、比島人は全て銃を持ったゲリラとなつておりました。舟艇のない海上挺進隊はピストルと軍刀だけの丸裸であり、基地大隊は機関銃中隊があるだけで、米軍から見れば赤ん坊の手をひねるようなものであった、と思います。

その逆境の中、若林戦隊長は東支那海のバシー海峡で、敵潜水艦のため戦隊の主力を海没し、戦隊員は僅か一個小隊位がマニラに着いたような状況で、無念の涙にくれておられたと思います。

基地大隊の戦鬪を少しでも応援すべく若林戦隊長は柴沼・栗山の両群長に敵迫撃砲陣地への斬り込み爆破を命じ、三回

の斬り込みの末、爆破成功しましたが、残念ながら隊員は壮烈な戦死をとげました。

海上の主力を失い、陸上戦鬪では残りの兵をすべてを失つた若林戦隊長はただ一人となりました。

十七戦隊長富田大尉の配慮により、十七戦隊本部予備隊と第三中隊を若林戦隊長の指揮下に与えられ、ビノワガン脱出を計りました。然し、折からの大潮の干潮に当り、ビノワガン河口に第三中隊は残留を余儀なくされました。

私が河口で第三中隊の松野君達と分かれてから五十年、彼らの事についての消息は全く不明でした。

河口で敵機の機銃掃射とロケット砲の攻撃を受けて戦死したのか？或は基地大隊の一部と共に、北東方のモンテンルバの山々の方へ行こうと、敵中突破行の最中に戦死したものと推定しております。

松野君は関東学院であり、小生は関西学院であったため話が合い、彼の家は横浜の伊勢崎町であることを聞いておりましたので、昭和二十三年頃、伊勢崎町を訪れ、彼の戦死の日を二月十一日と推定する旨をお話申し上げてきました。彼の家は戦火で焼け落ち、その焼け跡にバラツ

クを建てて住んでおられました。

それから五十年、御遺族はその後どうしておられるかと、心にかかりながらも、昭和二十四年結核入院、手術退院後、松阪、大阪、札幌、青森、仙台、山形、三重、愛知と転勤を続けましたために、御遺族も私の消息を掴むことができなかったと思います。

たまたま、豊浜会の土橋健二君と会合の際、松野君御遺族の事を話しましたところ、伊勢崎町には友人も多いとのこと、早速調べてもらった結果、御遺族と連絡がついたことと、昭和四十五年に彼の日章旗が米国から留学生に託送されて帰ってきていたことがわかりました。

早速土橋君と共に上京、御遺族宅を訪問。日章旗に会えることができました。

仏壇にたたんであった彼の日章旗に「おつ松野」といったきり言葉もありませんでした。旗についた血潮のあと、血潮の中に軍刀で刺したような刺し傷があります。

彼の出陣前の勇姿を見る時、当時の戦鬪の数々が走馬灯の如く浮かび、涙なきを得ませんでした。

この日章旗が日本へ帰ってきた経過について少し書いてみます。

米軍人がルソン島で凱旋の土産に日本軍の軍刀、旗などを欲しがり、比島人青年に探して欲しいと頼んだところ、この旗を持ってきたそうです。彼らは日章旗の寄書きが何の意味かわからず、作戦の命令が書いてあるものと思っていたそうです。

しかし、血染めの部分は何度洗つてもとれないことに気がつき、それから何か気にかかるようになって、夢でうなされるようになったそうです。この日章旗が逃げて逃げても追いかけて来る。恐ろしい夢だったそうです。この旗には日本軍人の霊がこもっているものと思い、何とか彼の遺族に返す方法はないか思案中だったそうです。そこで彼の友人の所に日本人留学生がきていることを知り、ぜひ日本で遺族へお返しして欲しい、と依頼したそうです。

日本人留学生は、郷里四国愛媛県の新聞で遺族を探したのですが反応がなく、遂にNHK木島則雄のモーニングショーに出して探したそうです。そのテレビを妹さんが見て、松野という字に同じ苗字だなあと、思っていたら、その下に伊三太という字を見て驚いたそうです。

早速NHKに連絡して、モーニングショーの番組中でいただいで来たそうです。松

野はこの旗と共に祖国へ帰ってきました。

今回、松野君のご遺族と、戦場から十四年ぶりに帰ってきた遺品の日章旗に会い、墓参りもできたことは、豊浜会の土橋健二君のお陰と心から感謝している次第です。

彼の凛々しい姿と日章旗を見る時、彼の無念さ、くやしさが心につき刺さってきます。ご遺族の悲しさ、無念さに、慰めの言葉もなく、ただ般若心経を唱え、ご冥福を祈るばかりでした。

平成九年七月二日  
（海上挺進二十戦隊の会会報  
第二十五号より転載）

### 第一九戦隊及び基地第一九大隊戦闘経過

会 員 中溝 二郎

海上挺進第一九戦隊は、昭和十九年九月から幸ノ浦基地に入り、正式には十月十五日、暁第一九七五八部隊として宇形で編成を行なった。

戦隊長は陸士五四期の井奥定司大尉、第一中隊長は加用信彦中尉、第二中隊長は木村則久中尉（いずれも陸士五六期）、第三中隊長は和田実少尉（陸士五七期）で、本部付として佐々木正夫見習士官（幹候一〇期 二〇年一月少尉）がおり

群長は豊浜の船舶幹候隊出身幹候一二期の見習士官、隊員は特幹の一期生（十九年十一月伍長）であった。

戦隊は、編成後も幸ノ浦基地で舟艇訓練に当たり、舟艇の建造を待った後、十一月三日に仁洋丸に乗船して門司港を出航し、一時三池港に廻航した後、同月六日に同港を出て門司に帰り、ここで戦隊本部と第三中隊が江戸川丸に、第一・第二中隊は仁洋丸（一八戦隊の一部が同乗していた）に分乗した。

「戦時輸送船団史」によると、江戸川丸の所属していた船団八隻（ミ二七）は十一月十五日門司を出発したが十七日二二〇〇頃斉州島西方にて米潜の魚雷攻撃を受け江戸川丸等四隻が被雷沈没した。この時一九戦隊の一部は鎮海丸（一八戦隊員が乗船していた）に一時救助されたが、これも更に撃沈されたため、戦隊長以下四十五名が海上戦死となった。

（この時の救助された者は数名といわれるが、明確な記録はない。）

又、仁洋丸の所属した船団十一隻（モマ〇七）は十一月十日三池港を出発したが、十二日早朝長崎南西四〇〇軒附近にて米潜水艦の魚雷攻撃を受け僚船四隻が被雷沈没した（この中に一八戦隊員の乗船していた辰昭丸等がある）。仁洋丸は

この攻撃を回避して単独航行で上海に向かい、同港に寄港した後十一月十九日頃台湾の高雄港に着いた。

沈没を免れた仁洋丸は、高雄港において船団を再編成し(タマ三四)、十二月三日、七隻の船団でルソンに向けて出航した。

ところが、十二月六日二一四七、バブヤン群島ダルピリ島西方五五キロ附近(北緯一八度五二分東経一二〇度五七分附近)に達したとき、まず仁洋丸(六八六二総トン)が右舷三番船倉と右舷四番船倉に被雷して火災が発生し、船内には両破孔からの浸水で早くも総員退船が発令された。船体は刻々沈下を続け、二二一〇に全没した。本船には海上挺進第一八戦隊、同第一九戦隊他一五〇三名が乗船していたが、遭難により船員を含め一四三〇名が戦死した。多数戦死の原因は被雷による船内死亡と、当時海上が大時化で、強風と激浪がさかまく洋上に脱出したため、波にのまれ海没したのが主たるものであった。一(この時第一八戦隊員の乗船していた福洋丸も沈没した)

ンフェルナンドに上陸、当地の陸軍病院にて手当を受け、三十日にマニラに着いた。この再度の海没により戦隊の人員は八名になってしまった。(負傷していた特幹本郷勇を病院に残したが、その後の消息不明)

マニラでは、同市のリサール公園に在留中の一九大隊の一部と過ごしていたが、二十年一月六日ラグナ湖南部のサンワケン町(タナワン町の東南で、サンパブロとの中間)に至り、第二漁撈長(第二海上挺進基地隊長)堤中佐の指揮下に入り、頭初はタリン湾のナスグブが任地であるので、一月三十日ナスグブに向かった。しかし、人員が少なく舟艇も無いため、基地本部に帰隊を命ぜられ再びサンワケンに引き返した。

その後、命によりマルプニヨ山(第一七連隊Ⅱ藤兵団主力の所在地)で一九大隊の一部とともに齊藤中尉(一八戦隊の整備中隊長か?)の指揮下に入って洞くつ陣地設定に当たっていた。

一月末、米軍のルソン南部上陸に伴い、戦闘態勢に入り、三月二十六日に堤中佐の直隸隊となり、持久態勢をとるためマルプニヨ山から北上して、マキリン山に移動し、二十七日から五月中旬までマキリン山地帯でゲリラ隊と若干の戦闘を行

なうかたわら自活していたが、米軍がタナワン、サントトーマスに進攻してきたので、五月二十六日態勢整備のため命令を受けて、マキリン山からマルプニヨ山に移動した。

その後、六月二十三日頃マルプニヨ山からバナハオ山の峡谷に駐屯中の第一九大隊と合流しここに宿営した。八月八日からは藤兵団本部に属していた藤堂隊(第一三戦隊第一中隊長の藤堂高豊中尉)に配属を命ぜられ、バナハオ山頂を越えて藤兵団本部迄移動。(移動中勝俣見習士官戦死)以後同隊に属して戦闘に従事中敗戦を迎えた。

以上のように戦死のほとんどは海没であるが、戦死者は将校一五名、隊員八〇名、下士官四名の合計九九名であった。(他に内地での事故生存者(転属)と思われる者一名があった。)

海上挺進基地第一九大隊は、通称号は暁第七二五九部隊、比島現地では防諜名として漁撈第一九大隊、または一一九大隊と呼ばれていた。

昭和十九年九月十八日、大隊長滝沢藤四郎大尉(八期の特別現役志願将校)の下に、秋田の東部五九部隊で編成を行ない、副官に斎藤要吉中尉、中隊長には大

友、石川、坂田の各中尉がいた。

十月二日に秋田を発つて四日宇品に着き、翌五日門司に向け宇品を出発した。なお大隊長は先遣のため空路比島に向け先発した。

十月六日、大博丸（第一四戦隊の一部も乗船）に乗船して門司を出航し、九日に伊万里港に寄港した後、十九日に十三隻の船団を編成して出航、二十二日に台湾の高雄港に着き、船団再編の後翌二十三日に同港を出航し、比島向け南下しバシー海峡にかかった時、ここで二十六日に米潜水艦の魚雷攻撃により、同船は撃破されて半没状態になり、この際の爆発で大隊の勝本少尉以下九名が戦死した。

次いで船団はバターン半島沖合で、再び魚雷攻撃を受け、十三隻中七隻が沈没、兵員及び装備を失った。

十月三十日によくマニラ港に到着し、翌々一日にマニラ市に上陸、ここで先着していた大隊長の指揮下に入った。

十一月二十日、第一中隊の大部分だけをマニラに残し、主力はナスグブ海岸のタリン湾に基地設営のため移動し、本部はナスグブ奥地のビノブサンに設置し、十二月一日から第二、第三中隊と第一中隊の一部は、タリン湾で舟艇秘匿及び整備作業や陸上戦闘に備えて、陣地構築作

業に従事していた。

しかし、結局第一九戦隊は、海没のため到着できず、代わって昭和二十年一月五日に、第一五戦隊から第二中隊長上野中尉以下二二名が分遣されてきたため、一月三十一日にはその出撃のための泛水作業を行なった。

二月二日には、西谷少尉を指揮者とする遊撃隊が選抜され、タガイタイ（タール湖北方）方面に降下した米軍の空挺部隊に挟撃される形になった三一連隊の高橋大隊を救援のため、その方面に出発した。

二月二十一日、第二基地本部（堤中佐）から、大隊主力はサンパブロ地区に警備につくよう命令を受け、タールを経てクエンカに到着し、ここで藤兵団司令部に兵力一五〇名を転属させることになった。

主力は二十八日にクエンカを出発（厚生省の名簿によれば二十七日ナスグブに着き、二十八日同地を出発となっているが、これはクエンカの誤りと判断する）して三月一日にサンパブロ市に到着、三〇〇名で第一六大隊（佐沢大隊）と交替し、同市付近で陣地構築と地区警備につき、ゲリラの掃討に当たっていた。

四月一日から同市の近辺及び五日からはサンタクララで、藤兵団（一七連隊）

の第七中隊とともに、マニラ方面から南下した米軍と市街戦となり、人員に甚大な被害を出し、大隊としての戦力を失い、同市からの撤退を余儀なくされ、藤兵団陣地のあったマルプニヨ山東方高地に陣地を移動し、更に四月二十八日に藤兵団本部がマルプニヨ山を撤退してバナハオ山に移動するに際しては、その後方警備を担当し、撤退完了後四月二十九日に同じくバナハオ山を目指して移動し、同山地帯に布陣し、ここを拠点としてバナハオの南部地帯であるハロボ平地、ロボ方面に散在して、なお一部はバタンガス州内のボルボック平地で、遊撃戦を行ないながら、食糧確保に当たっていた。

これらの転戦により、同大隊の戦死者は、総員九三二名中七五四名を出し、生還者は一七八名であった。

### 海上挺進第十九戦隊戦闘行動経過

元第十九戦隊 古角 孝

はじめに

特幹第一期生が 昭和十九年八月の末に一時休暇をもらって、それぞれ帰郷した人、帰ることのできなかつた人々、いろいろな想いをもって新しい転属先に向つた。

九月上旬に広島市宇品陸軍船舶司令部



に集合した。上陸用舟艇に乗せられて、すぐ目の前にあった島に到着した。巍巍たる山を背影にした浜辺で、そこには木の香も新しい簡易な兵舎が立ち並んでいた。そこが、我々が起居・訓練にはげむ兵舎だった。「幸之浦」という地名だと後日知ったのであったが、江田島の裏側ということは、全く知らなかった。但し、凄しい緊張感が、その浜辺一杯に漂っているのを感じたのは、我々の兵舎とは別棟の入口に 勇壮な名前がつけられ掲げられていたのに緊迫感を覚えたのかも知れない。鉄血隊・万朶隊など、勇ましい文字が目に入ると、血湧き肉躍るの想いに引きずり込まれ、我々も「早くこういう名前をつけられて、出陣したいものだ」と思うようになっていた。その幸之浦の兵舎で一ヶ月も経たないうちに、二度ほど編成変えになった。十九年四月十日から、行動を共にしてきた旧六中隊

(愛知) 濟州島沖  
(香川) 大川 肇 見習士官  
(香川) 勝俣 喜一 見習士官  
(長野) 多田 一郎 見習士官  
(鹿児島) 武井 幸雄 見習士官  
(鹿児島) 中條 正勝 見習士官  
(徳島) 津村 正勝 見習士官  
(栃木) 照沼喜三郎 見習士官  
(茨城) 友山 忠三 見習士官  
(愛知) 長戸 重夫 見習士官  
(東京) 藤原 英一 見習士官  
(兵庫) 濟州島沖

戦隊の編成

去る一九九三年十月六日 厚生省社会

援護局業務第一課・調査資料室資料第一係の方から「戦死者名簿等の送付に付いて」として「海上挺進第十九戦隊略歴」と「戦死者名簿」を送っていただいた。戦死者九十九名である。第十九戦隊は百六名の要員で編成されていた。

戦隊長 井奥 定司 大尉

(陸士五十四期)(兵庫) 濟州島沖

第一中隊長 加用 信彦 中尉

(陸士五十六期)(広島) 中尉

第二中隊長 木村則久 中尉

(陸士五十六期)(京都) 中尉

第三中隊長 和田 実 少尉

(陸士五十七期)(東京) 見習士官

(松本隊)の同僚が、少しづついづれかに行きはじめた。極秘なので、どこへどんな任務かわからなかったが、ある非常事態が我々に下される日が近いことを、

肌を感じずにはおられなかった。そんな日々を送っていた十月中旬に激しい暴風雨が、幸之浦を襲った。

大変な台風であった。浜辺の舟艇を

岡田 好男 伍長

村野 卓士 軍曹

太田 清 伍長

(熊本) 伍長

以上の人々が我々の上司として来られた。短い期間を舟艇訓練に励んだが、舟艇が不足なので、一艇に二人・三人の搭乗で日夜訓練した。或る日、井奥戦隊長が兵舎の一隅に隊員を集めて演芸会を開いた。各中隊・小隊からでた隊員たちの

ノド自慢・お国自慢の歌を黙然として聞いていた井奥大尉の面影は今もなお、私の脳裏から離れない。

### 編成とその前後

「南方に動く」の噂が誰からとなくでてきたが、その噂通り日を置かず宇品港に停泊中の貨物船に乗船して西の方に向かった。

瀬戸内海を西に向かったのだったが、すぐに下船を命じられた。そこは下関の近くの島であった。この島の名前は最近になってから、十八戦隊の倉井則雄氏からの便りでわかったものだが「彦島」という島だったそうである。その小学校の屋内運動場で起居をはじめた。そのうち、戦隊員に官給品が支給された。軍装一式であった。

### 一、襟章

伍長の襟章であった。それまで我々は上等兵で星三つの階級章に座金をつけている候補生スタイルだったのだが、兵長をしないで伍長になるということは二階級特進だといって喜んでいた・・・。階級を一つ飛ばす事は十九年四月十日の入隊時と同じである。

### 二、サーベル

騎兵隊用の軍刀と同じ型であったが、

光らないように黒く錆止めがほどこされていた。(九十五年式という)

### 三、拳銃

茶色の皮ケースに入っている六発弾元込めの二十六年式という型で、弾丸は現地についてからという。

### 四、救命具

航空兵の救命具のように縦縞に縫い込んで股下をくぐらせて、縛るようになっている。私たちにとっても格好よく思っていたものだけに大喜びであったが。

その内ポケットの中に伸縮自在の「小型の日章旗」が入っていた(※このとき考えもしなかったが、この「日の丸」を使用するときとは、どんな状況下で使用するのか?など考える余裕もない環境と熱気と幼さであった。すべてを軍に(?)委せている)・・・の心境であったから、以上のような支給品に大感激したのもだった。

### 戦隊の出陣と悲運

十一月三日(明治節)仁洋丸に乗船、門司の港を出港した。どんな理由があったのかかわからないが、また、門司港に戻ってきた。誰かの本に記載されていたが三池港に廻港したというが、戦隊員には知らされていないのである。十一月十二日

十四日の間に、舟艇の積み替えなどしたのも、その折だったかも知れない。

甲板にも積まれた我々の舟艇①は、二層にも積載され、ロープで嚴重に縛られ輸送船が揺れても動かないように固定されたのであった。

井奥戦隊長・本部・第三中隊・戦隊員が、江戸川丸に乗り、第一中隊・第二中隊は仁洋丸に分乗していた。出航した船団の数は九隻という。この中に十八戦隊を乗せた鎮海丸もいた。

### 濟州島沖の悲運

船団の九隻のうち六隻が沈んだ。この沈められた輸送船のうちに鎮海丸もいた。最初は無事だったが、他の海没者を救助したことで、又敵の攻撃を受けて海没した。

濟州島沖の戦死者の数は、十九戦隊員の半数で井奥大尉以下四十五名という。

江戸川丸に乗船した戦隊員には右のような大きな犠牲がいたのである。鎮海丸も撃沈の憂き目を見るが、不幸な重なりが殊更に被害を大きくしたものと思える。なお仁洋丸がこの危難を回避できたことはせめてもの天運であった。上海港に寄港、台湾沖を通り高雄港に入港した。十一月末頃であった。高雄では黒砂糖など

の支給を美味して、船団を新たに編成して十二月三日頃 比島に向かって出港する。

### バシー海峡の悲しみ

台湾の南端から出航して バシー海峡にさしかかった。十二月六日早晩に米潜水艦の攻撃を受ける。仁洋丸も戦時急造船とかいって、我々の乗った船倉は案外に簡易な内部で、水が入ってきたら境になる壁も少ないという(?)事情もあつたのか、魚雷を受けるとすぐ沈没する船体であつた。こうした魚雷攻撃などの破壊・浸水に対して耐久性が弱い船体であつたことに加えて、高雄港での編成の折に、より多くの人員を乗船させたので、船内は満杯の乗員であつた。二段ベットに船内を改装していたので、魚雷命中のときはパニックの状態であつた。

加用第一中隊長、木村第二中隊長、見習士官の方々が、軍刀を抜いて甲板に搭載していた①のロープを切り出したが、仲々に切れない。「退避せよ!」の命令。大声で叫んでいた。船内から甲板に出てくるのに遅れた人々もいたと思うが、海中に飛び込んだ連中は余り多くはなかつたようだ。

②が海没時に浮いていたら・・・。

(頑丈に縛り付けていたことが、かえって仇になったとは・・・)。加用隊、木村隊、他の方々も殆んど海没戦死である。五十一名の犠牲者である。勝俣見習士官以下九名が海軍の呉竹丸に救助される。弱つた体力を比島リンガエン湾北サンフエルナンドの陸軍病院で手当を受ける。一昼夜以上、バシー海峡の潮流に流され気力体力共に極限状態であつた。生存者も歩行が漸くであつた。怪我をした本郷勇君を病院に置いて我々は十二月三十日マニラの船舶司令部に行く。マニラの九基地大隊の一部の兵隊達と共に過ごしていたが、急遽一月六日頃 勝俣群長と共に南部呂宋のサンワケンという町に入り海上挺進隊、第二基地本部長、堤仙雄中佐(陸士三十六期)の指揮下にはいつた。池田道夫君はマニラに残つた。

〔第二基地本部...第六、第十三、第十の各戦隊及び基地大隊を掌握し、指揮に当たつた。当初は方面軍司令部の直接指揮下にあつたが、戦勢の赴くところ、第八師団長の指揮下に入り、第八師団が振武集団として、マニラ東方拠点陣地に北上したのに伴いこれに代わつて南部ルソン守備となつた藤兵団(第十七連隊長藤重大佐の指揮)との共同守備となつた。〕

比島南部呂宋での行動

勝俣群長一人が先遣といふことでタリン湾のナスグブに派遣された。我々は、堤中佐のいる本部の斜め向いで、志摩権作・葛城信義・中野健四郎・宮園信一郎・谷山健次の諸君となすこともなく過ごしていた或る日、マニラ船舶司令部に残つていた池田道夫君がヒョッコリと戻つて来た。特幹の七名で風通しの良い、現地人の空家で陽気なひとときを過ごした。僅かな期間であつた。

二十年一月三十日午前 基地十九大隊の青山軍曹の引率でトラックに乗り、任地のナスグブに向かった。夕刻 ナスグブに到着する。十九大隊の誰かが、勝俣群長に連絡してくれた。砲の轟音がどろいていたように思う。到着した近辺には着弾していなかつたが、何処か他の部隊が攻撃されていたのかもしれない。そんな状況であつたが、勝俣群長は「ただちに第二基地本部に戻る」といつて、再び青山軍曹のトラックに乗つてサンワケンの街に引き返した。

その理由として・・・  
1 後日見聞して知り得たのだがナスグブ周辺に敵機動部隊が既に迫つていた。  
2 十九戦隊(我々)に一隻も③舟艇がなかつた。

3 十五戦隊から上野中隊がここに派遣されていた。それで我々の人員は必要ない、などの理由で基地本部に帰隊を命ぜられたものと思われた。

昼間疾駆した街道は暗夜になっていた。街道の両側は椰子林が延々と続いている。その椰子林の奥から疾駆するトラックのライト目がけて、銃弾がとんでくる。幸い何の被害もなく、夜も深更にサンワケンに到着する。

幾日も経ずして移動を命ぜられた。我々は、五・六名の兵たちの荷車に荷を積んで歩き続けた。夕方暗くなつてからである。

とある小さな集落に着いた。地名は記憶にないが、その村の長老が胡椒の香のスープ(?)とバナナを馳走して呉れたのが、我々特幹兵にとつては場違いの特別待遇だったの思ひであつた。二日か三日そこに泊まっていた。そこで 集落のはずれに駐屯していた斉藤中尉の指揮下に入った。斉藤中尉は整備中隊の中隊長と言つておられた。どこの基地大隊の整備中隊か聞き漏らしたが、温和な中尉であつた。(十八大隊か?)

サンワケンを発つてから、我々特幹隊員と十九基地隊員(一部)と斉藤中尉の隊と過ごしている処へ、勝俣群長が第二

基地隊本部からの命令をもつてこの集落にこられた。

「マルプニユ山に入って戦闘準備をせよ」という命令である。二月も中旬だつた。我々は更に、マルプニユ山の奥に入つていった。

齊藤中尉 勝俣群長

佐藤班長(伍長) 十九大隊)

他十数名

佐藤班長(伍長) 他十数名

特幹隊員(伍長) 七名

指揮班

(佐野兵長) 他五、六名

こんな斉藤隊の編成がなされた。どこから届いたのか、シャベル、モッコ、ツルハシ等々揃えられる。奇しくも、斉藤中尉の指揮下に佐藤伍長が二人いたのである。

前者の佐藤伍長は十九基地大隊の方でありその班員は殆ど、秋田縣出身の人たちであつた。後者の佐藤伍長は基地隊は不明だが、山形縣西賜置郡の出身と聞いた。総勢で四十名たらずの戦闘準備といふのは、山奥の急峻な「崖つぶち」に洞窟を掘ることであつた。その作業(戦闘準備)がはじめられたのは、二月中旬になつていただろうか? 入口が五、六米

の洞窟である。掘り出した岩石・土は、断崖から谷合いに打ち捨てるのである。

掘り進むにつれて崖肌に捨てられた赤い土の色が目立つようになる。米軍の観測機の目に触れると、大変だと椰子の葉を覆つたりして、悪戦苦闘の連続であつた。

日夜兼行で掘つた。約一ヶ月近く作業に励んだ。奥行きが二十米程掘り進んだところで作業終了の命令が出た。完了したのか、他の周囲の事情が終わらせたのかは解らないけど一応掘削は中止して、その洞窟へ荷物の搬入のため毎日をついやした。

山腹の中程にどこからか運ばれていた食料を 洞窟内に運搬するのが仕事になつた。肩の皮膚が、背中の皮が血をにぢますほどで、海没で体力が消耗していた戦隊員たちにとつては、大変な仕事であつた。三月二十四日頃運搬を終え、洞窟の入口を閉鎖した。(この洞窟の食料は後日、藤兵団の人々の兵糧になつたものと思われる。)

### マルプニユ山から移動

三月二十六日齊藤中尉、勝俣群長らに率いられてマルプニユ山から下山する。マルプニユ山からマキリン山に移動するといふのである。第二基地隊本部と合流し

た。齊藤中尉、佐藤伍長二人の班は本部と共に出発する。我々特幹戦隊員のみ七名は別動隊として、主力部隊から四、五時間遅れて出発した。

部隊長の乗馬に他の馬を加え荷を積んでマルプニユを後にした。サントトーマス近くになったところで、負傷者に続々と行き交う。サントトーマスの防衛軍の第六基地大隊の兵たちだった。我々は戦場の緊張というのを実感し出したのはこの頃であった。気を取り直して、我々は懸命にマキリン山に移動した本部を探し、そのマキリン山の入口を探した。昏くなる頃齊藤中尉、勝俣群長の部隊に逢うことができたので安堵したものだ。その夜のうちに堤中佐第二基地本部、齊藤隊、勝俣隊が隊伍を整えてマキリン山の奥深く転進をはじめたのである。道なき道、深い谷間越え、漸くたどり着いた八合目付近の岩間に本部は陣を布いた。堤中佐以下若干の本部要員、あとは齊藤中尉の隊（両佐藤分隊）、勝俣群長の特幹七名という総勢七十名前後の部隊である。重機関銃一、軽機関銃一、擲弾筒という装備であった。我々戦隊員の武器は小銃が三、四丁という侘しい装備である。

### マキリン山の行動

四月九日夜、斥候を命ぜられ佐野兵長

（静岡）阿部一等兵（山形）と共にマキリン山のロスパニオス側の道を偵察に行く。四月十日朝、帰途についてあと少しで部隊本部に辿りつくと思つたとたんゲリラに待ち伏せされていたらしく銃弾を浴びた。佐野兵長は腹部貫通で倒れ、私は足首と大腿部に銃の破片創を受ける。大きな枯れた丸太が横たわっていたので、そこへ佐野兵長を寝かせ「仮包帯も弾の中」の歌詞通り処置をし、手榴弾を佐野兵長に一発置いて、佐野兵長の銃を借りて横に突っ走り、谷間に転げ込んだ。運よく本部に辿りついたとき、阿部君が無事に戻り、救出隊を編成して、佐野兵長を助け出した。これもまた四月十日だった。その後、部隊本部・堤部隊は敵に攻略を受けたが、一人の方が亡くなつただけで被害は最小限であった。

敵は迫撃砲を撃つてくるので本当に困つた。堤中佐の「信念」みたいものを感じたのはその頃であった。斯うしている中は辛かった。佐野兵長の腹部も蛆虫が湧いてきていた。「ヨードチンキ」しかなかったから充分な手当も出来ない。私の足の方も創が治癒しない。そうしている中、五月二十六日夜、また転進命令が出た。またマルプニユ山に移動するということになった。

### 再びマルプニユに転進

戦闘能力のない部隊・戦闘装備が何もない基地隊の本部とすれば、仕方のない転進であった。五月二十六日深更から山をおりはじめた。翌日が海軍記念日なので記憶に残っている。

マキリン山の七・八合目の高さの所から下界を見下ろすと眺望が大きく拡つていた。右側の彼方にマルプニユ山の丘陵が延々として伸びている。左側方面を遠望すると、かすかにバナホウ山が屹立している。南部呂宋の野に三角形を作る型で、マルプニユ山、マキリン山、バナホウ山の三山が、それぞれ特異の山容を見せていた。

最初に任務についたマルプニユ山から、マキリン山へ・・・そしてまたマルプニユ山へと移動を開始したのであった。我々が三月の下旬マキリン山に移つたあと陣地をはって、米軍に抗した藤兵団の激戦はマキリン山からも遠望された。緑の山だった丘陵地帯は赤褐色の道路のようなものができていた。米軍の攻撃の激しさ、砲撃・爆撃などで、緑の山容が一変してしまつた。遠くのマルプニユ山の砲声砲煙が望まれたが、堤中佐以下は何等なすこともなく辛い想いで、藤兵団諸氏の戦鬪を歯ざしりして望見していたものだ。そのマルプニユの山に転進になつたので



ある。

堤部隊はマキリン山で敵の攻撃を受けた時の戦闘で、重機関銃の弾薬が切れてしまっていた。今回の遠路の転進のため、秋山兵長が重機を分解して地下に埋めて本隊・本部と行を共にした。

正に敗残の兵の集団であった。日中、陽の射すときは椰子林に身をひそめ夜になると月明りを頼みに粛々と進む。サントトーマスからサンバブロに通じる街道を夜に紛れ横断した朝方、部隊は突如襲撃を受けた。小さな部落の朝餉の煙が立っているのを右に見ながら部隊は少しでも山奥に、街道からより遠くへと思つて無理をして進んだことが敵に見付かつたのかも知れない。襲撃されたとき我が勝部隊は「シンガリ」の様に最後列から本隊について歩いていてしたが、銃声が打ち込まれたときには何人かがすぐそばの溝のよなな地隙に退避していた。気がつくつと、堤中佐以下三十名にも満たない人達が残っていた。

見てこい」と斥候を命じられた。マルプニユ山方向が漸く確認されてからまた暗夜の強行軍であった。

堤中佐以下我々は、三月末まで掘つていた洞窟付近に漸く辿りついた。然し洞窟の前に立ったときは驚いた。洞窟の中は完全に空っぽであった。兵の遺体も散見される。小休止していると、チリヂリになつていた人々が合流し、洞窟より二、三軒上流の川畔に宿営する。一夜明けるとすぐ出発である。物凄い風と雨である。日中は敵の攻撃をさけて夜のみ行軍である。兵隊はマキリン山を出発した七十名だった部隊が相当少ない人員になつていく。

齊藤中尉に「部隊の野営地を探すように」との命令でまた斥候調査に出かけた。三度目の斥候である。丁度近くに小さな流れの谷合いを見つける。木の余り多くない所であったのだが、その狭地に誘導した。そこに一週間程度宿営し、また今度は峰続きの小高い丘陵に移動する。こうして二週間程過ぎす。その丘陵の頂上から離れてきたマキリン山が見え、またバナホウ山が見える。サンバブロの街も望むことができる所であった。

(二一八八米)である。サンバブロの側の街道を横切るのにはまた大変なことだった。三、四人づつ敵の車のライトの間隙をぬいながらである。漸くの思いで、バナホウ山の峡谷に到着してみると矢張り部隊の人たちは、バラバラで、まとまって到着したのではなかった。しかし、すぐ二、三日中に後続・別れた集団がその谷の上の方に滝沢第十九大隊が宿営していたのであった。

我々特幹は満足な格好をしている者は誰もいない。勝俣群長以下ホントに惨憺たる姿ではあったが、無事に十九基地大隊と一緒にいるとは思つてもいなかっただけに、本当に嬉しかった。だが、マルプニユ山から転進のとき、途中で他の戦隊の二人と出合った。「我々の部隊と一緒に行動しよう！」と声をかけ誘つたが、そのうちの一人が「友人が歩けない。俺はこの友人の面倒を見て頑張つて何とかしていく。君たちだけでいって呉れ。」と言つて、我々の部隊と行動を共にする様子がなかった。

諦めて勝俣群長と我々は別離の言葉を残し別れたが「何処の戦隊員だったか？ 無事に山を降りることができたのだろうか？ ・ ・ ・」今でもそのことが気になつている（東京都出身といつていた）。十

う伝えてきた。この地隙溝が「最後の地」になると考えられたのかも知れない。飛行機も低空でくる。どの位経つたのか？ あとは寂として攻撃は仕掛けて来ない。

我々も覚悟して時の経つのに委せていたら、夕闇が迫ってきた。再び「周辺を

我々も覚悟して時の経つのに委せていたら、夕闇が迫ってきた。再び「周辺を

九大隊には早くから他の戦隊員もいたようだ。十三戦隊、十四戦隊の人たちであった。

### バナホウ山への移動

七月初旬から八月初旬までが案外に静かな山の中のくらしであった。食べられるものは何でも食べた。「何でも」であった。塩もなく味気もないが「小さな唐辛子」を入れて辛いだけの味だが、飯盒でおひたしにするのにも「葉ツパ」だけを沢山とつてこなければならぬ。「キヤサバカモチイ」「薩摩芋」などは殆ど他部隊の通過あとで残っていない。飢餓と栄養失調で戦隊員は体力の限界を感じていた。そんなくらしを続けていたが八月初旬、勝俣群長が堤中佐からの命令を伝えてきた。第二基地隊本部から勝俣群長以下の十九戦隊員、第十三戦隊員、第十四戦隊員の全員が「藤兵団にいる藤堂高豊中尉（第十三戦隊第一中隊長 陸士五十七期）の指揮下に入るよう」ということであった。

な山あいを登り続ける。途中、道に迷う。勝俣群長が朝早く斥候にいくといって単独で出かけた。（途中の道路上にてそのまま死亡）。

バナホウ山の頂上付近は噴火の跡で、眼下が直角に切り下がった断崖絶壁である。頂上なので、雨か雲かわからない中に包まれてしまつて、一歩も歩けない状態になった。そこで宿営することに決めた。その辺りの生木を切る。生木の枝を小さくする。マツチ棒位にまでする。何人かが手伝つて呉れた。志摩権作君がマツチを持っていたのである。私は紙をもつていた・・・漸く火を起こし焚火をはじめた。寒さのため十四、五名が交替で暖まつた。雨の中でも生木でも燃えるものだとしみじみ感じつつ無事にその夜を過ごしたのであった。（志摩君以外には誰もマツチをもつていた人はいなかった）

そうして一夜明けると、隊員同志が顔を見合せて、驚いたものだ。それは焙つた煙（渋）が茶色がかつたタールになつて化粧したようになっていた。

藤兵団に到着し、漸く転属の申告を終えたのは八月十日頃だったと思う。直ちに、藤堂隊に配属になる。藤堂隊に配属になつても何の命令もない。隊として人事も命令もなく、各人は自由にせよという感じ。将校一名を戦死させながら、

「不干渉」と思われる転属劇である。それでも、各人は野草、いも、或いは原住民部落を襲うなどして食料に「アリック」ことを考えていた。中野健四郎君が逝つたのも、そんな時だった。バナホウ山でタツタ一週間も経たないうちに二人の戦病死者を出したことは、生存者として本当に悔やまれることだった。

### 無条件降伏 復員

九月二十日頃になつて、誰かの口から「日本は敗れた、降伏だ」という噂を聞くようになった。時折、「伝單」が敵飛行機から撒かれていたが、半分は敵のデマ宣伝かと思つていたが、どうも事実らしいということになった。九月二十四、五日頃、藤堂中尉から身辺を整理して、敵の軍門に下るよう・・・と声涙を重ねて訓示された。

九月二十六日 山を降りたのはこれもまた奇しくも私の二十回目の誕生日であった。ルクバンに降りた。そして POW の収容所に入った。

復員帰国は昭和二十一年十二月十四日名古屋港についたと思う。

生還者

志摩権作・葛城信義・宮園信一郎・谷山健次・池田道夫・古角孝

## イリサンの戦車特攻(再掲載)

『本記事は会報特攻13号に掲載されたものです。イリサンの戦車特攻については纏まった記事としては一番のものであるので、再度掲載するものです。』

本件については「戦車第十聯隊史」に詳述されているので、ここに抜粋し転載させてもらうことにした。なお同聯隊史は昭和63年に発刊されたもので編集者は鹿江武平氏(特攻隊慰霊顕彰会理事)である。

弱小の我が戦車が、巨大な米軍M4戦車に対し、爆薬を前部に装着して体当たりした。これは日本陸軍戦車隊にとつて初めてのことであり、またこれが最後のものとなった。

第五中隊に丹羽特攻隊は、敢然としてこれを行い成功した。他兵団の種々の部隊は入り乱れて、イリサン死守に躍起となつているとき、何処に隠れていたのか、突然M4に向つて突進する我が戦車。何事が起つたのかと全員見守る中。

吹き上がる火の玉、黒煙、ワァツという歓声。

万歳を叫ぶ者、溢れる涙で顔をクシヤクシヤにして喜ぶ者。

「戦車の勇士を助ける。」と燃え上がる

戦車に向つて走り寄る盟兵団の戦友。  
戦車特攻の背景

それはどのように行われたのか、日米両軍の公刊戦史を掲げるので対照していただきたい。

先ず米軍戦史「フィリピンにおける勝利」から抜粋

『林支隊は、独立混成第五八旅団の第五四四大隊、第十九師団歩兵第七五聯隊の一大隊、独立混成第五八旅団の若干の砲兵、その他臨時歩兵大隊に改編された日本陸軍の船舶部隊からなつていた。六日間にわたつて行われたイリサン溪谷の戦闘は、バギオに向う前進の全道程において最も重要な戦闘であることが明らかになった。イリサン溪谷は9号道路のバウアンとバギオ間における最良の天然防陣地であつた。しかし佐藤將軍(注・独混五八旅団長)がこれを認識したときは既に遅かつた。』

四月十六日、日本軍は狂気のようになつて、増援部隊をイリサンに派遣した。バギオにある兵士で健全な者は、ことごとく前線に送られた。結局日本軍は千五百名以上をイリサンに派遣したが、実際適時に戦場に到着した兵員は、おそらく三分の一以上ではなかつたであろう。』

そして続いてイリサンの要図を掲げ、細部の地形、日本軍陣地の配備状況、これに対する米軍の攻撃を長々と述べ、最

後に四月十七日のことが記してある。次の通り

『十七日の朝、第一四八歩兵聯隊第二大隊の二個中隊は、中戦車、一〇五ミリ自走砲及び砲戦車支援のもと、橋梁のすぐ西の九号道の東西に走る箇所に沿つて攻撃したが、多大の損害を受けて撃退された。』

日本軍の対戦車砲火は、橋梁のそばの稜線の鼻を廻つた所で、二両のアメリカ戦車を破壊し、一方東の稜線の西斜面からくる日本軍の正確な機関銃及び小火器の火力は、第一四八聯隊の部隊を撃退した。

交戦間、日本軍は軽戦車二両を失つた。『ここで注意すべきは、初の稜線を廻つた所で、日本軍の対戦車砲によりM4二両がやられたという点である。』

これは重量わずか一五トンの日本軍戦車の特攻で、重量三二トンM4がやられたとは、その真実を発表できなかったからではないのか。

M4の装甲は、前面七〇ミリ、砲塔八〇ミリ、側面四〇ミリと云われ、日本軍の対戦車砲の三七ミリや四七ミリ砲では、効力は全然なかつたのである。

次に「二両のアメリカ戦車を破壊し云々」とあるのは正しい。また「日本軍は軽戦車二両を失つた。」とあるが、実際には中戦車「九七式・五七ミリ短砲身・一五

トン」一両、軽戦車（九五式・三七ミリ砲・七トン）一両計二両である。

次に日本側の公刊戦史を略記する。

『盟兵団（独立混成第五八旅団）は、三月二十七日頃ガリアノ方面が猛烈な敵の攻撃を受け始めたので、この方面が敵の主攻撃正面であると判断していた。ところがガリアノ方面は米の歩兵一個聯隊の陽動だけであって、実際の攻撃重点は、ナギリアン道のサブラン方面であったのである。』

この正面に、敵は二個聯隊即ち一二九聯隊と一四八聯隊を重畳使用して四月十一日から猛攻を開始した。十五日には、バナングンに戦車が突入してきた。急転危殆に陥ったナギリンド確保のため尚武派遣班長及び旭兵団（第二三師団）長は、可能なあらゆる部隊の転用を行ったが、時既に遅く、イリサン陣地は最終段階に至っており、今や策はなかつたのである。』

これを要するに、敵はナギリンドに重点を指向し、その両側にある我が陣地に対し、先ず徹底的に砲爆撃を行い、次いでM4を先頭にして突進してくる。M4の周囲には必ず歩兵が守っていて、日本軍の肉攻班がタコツボから頭を上げるこ

とができない程乱射してくる。数少ない我が歩兵の対戦車砲があつたとして、今仮にMに対して射撃して命中

したとしても、これはM4の装甲のペンキが剥げる程であつて、効果はない。かくてバギオの陥落は目前に迫つた

第五中隊が特攻を命ぜられたのは、このような戦況においてであつた。も早、頼みになるのは軍直轄の戦車隊だけであつた。

### 軍参謀の手紙

この手紙は私（鹿江）がこの戦闘について、当時軍参謀であつた渡辺博氏にお尋ねしたことに對し、昭和四十二年七月に頂いた御返書である。

『二十年の一月末から二月初め頃、バギオに對する敵地上部隊の攻撃は、主攻がベンネット道とナギリアン道の両正面から指向され、特にナギリアン道方面の敵の攻撃が進捗しておりました。

某日（鹿江注・四月十五日）同方面（鹿江注・バナングン）の陣地が突破され、このまま放置すれば、その日の夕又は翌朝にでも敵の戦車が、バギオに突入し得る距離まで迫りました。バギオは敵の空襲のみならず砲火にもさらされることになつたのです。

その時軍司令官には山下軍司令官、武藤参謀長と作戦担当の私と、確か三人だけ、他の参謀は皆第一線部隊の指導に出払つておりました。手許には、予備隊もなく、処置なしで苦慮して「おりまし

参謀長は既に自害の決意までしておられ、私のこのことを告げられました。私としては長期持久、敵を比島に牽制抑留すべき方針の達成のため、なんとか軍司令官と参謀長を、予め計画された複廊陣地方面に後退していただきたいと思いましたが、橋梁を落とされておりました。その時補修中の状況で、この実行も難しく、たいへん困惑しておりました。

そのとき軍司令官の呼び出しがあり、決死戦車隊三両を編成し、敵の突進を阻止するよう命ぜられました。

この措置こそ、目下の危機——バギオ正面二個師団と一個旅団の将来の退却を容易にし、かつバギオにある兵站諸部隊ならびに負傷者や軍需品の後退を実施しうるため——を救う唯一の手段であることを知り、

「ハイ」と答え、勇躍して桜井中隊に向つたのであります。

当時、桜井中隊はバギオ北方のトリニダット部落の小盆地の片隅に潜んでおりました。車を飛ばして桜井中隊に辿り着き、中隊長（注・桜井隆夫大尉・五四期）に現状を述べ、決死戦車三両の編成を伝えました。

桜井君は快諾して中隊全員を集合させ、その希望を募りました。そうしたら全員が希望しますので、桜井君の指示により、少年戦車兵からなる一両と、一般からな

る二両を編成したようにきおくしております。

その二両を連れて軍司令部に帰り、軍司令官に報告しました。

戦車小隊員は全員が日の丸の鉢巻をキリリと締めて、恭しく軍司令官山下大将から盃を頂いておりました。

その二両はナギリン道を下り、確かその翌々朝（鹿江注・四月十七日）だったと思いますが、道路の側方の隠れていて、敵戦車の進行を待ち、躍り出て体当たりをくらわせて、敵戦車から逃げ出す敵兵に短剣を擬して格闘し、敵の突進を完全に阻止しました。

お陰で、軍司令部首脳と兵站諸部隊の後退を可能としたばかりでなく、敵は震え上がったと見え、其の後約一週間バギオの陥落を延ばすことができたのです。友軍環視のもとで刺し違え

さて、実際の戦闘行動は、どのようであったのか。これについて先ず平井澄雄氏（当時指揮班人事・功績係准尉）の手記を掲載する。

『四月十五日、丹羽准尉以下十数名は、戦車服も凜々しく、山下軍司令官の前に立ち並び、悠然と恩賜の酒をいただいている。乗員の中には少年戦車兵も含まれている。弱冠十七、八歳のマメタン（少年戦車兵の愛称）は、可憐な頬を紅潮させ

ている。暫し、別れの謁を終り、やがて出発となった。

十五日、日没近く特攻戦車二両は、中隊長以下全員に見送られ、エンジンの音も軽くバギオを出発した。

戦車は装甲板の前端に爆薬を突き出した異様な姿であった。肉攻の車外員は、横腹に蒲団爆雷（座布団の大きさの約四分の一雑糞に入れてある）を抱え、腰に数発の榴弾を下げ、戦車の背中に跨乗している。人車とも決死体当り姿だ。途中の道路には友軍工兵がつくった敵戦車阻止の工事が所々にある。蝟壺には歩兵の肉攻

「頼むぞ！」と誰もが手を振って叫ぶ。

イリサン橋梁を通過後、敵前に潜み一夜を明かした。十七日朝が漸く明け始めた。車長の丹羽准尉と西曹長が敵情をつぶさに偵察すると、数百の敵歩兵が道路両側の高地を占領している。前方道路のカーブには、M4三両が停止しているのが見える。驚くべき巨体だ。耳をすませばM4のエンジン音が聞こえる。かすかに排気ガスの煙も見える。二、三の乗員が戦車に上ったり下りたりし始めた。これは戦闘準備の真最中なのか。

我が特攻戦車は、道路屈曲部竹藪の中に隠れ、完全に偽装してある。隊員は、発進は今か今かと待機している。

その時好機到来か。丹羽隊長は西曹長に何ごとかを口早に命じ、車上の人となった。西

「前へ！」

第一車は軽戦車 車長 丹羽治一准尉

第二車 中戦車 車長 西 利良曹長

操縦主 平野伊孝軍曹

操縦主 平野国雄軍曹

二軍ともに、下り斜面の道路を、ガスを吹かして驀進した。時に敵は我に気付いて戦闘の火蓋は切られた。左右の山地脚から敵の機関銃がバリバリ撃ち出した。弾丸は跨乗の車外員に集中する。

見ると敵戦車は浮足立って動き出し、その第一車は慌てて反転を始めたと思えるや、操向を誤ったのか、道路左側の谷地に転落して姿を消した。絶好のチャンス。我が両車は全噴射、惰力一杯、アツという瞬間M4に突入、火の玉が見えた瞬間、大爆発が起きた。彼我の戦車は濛々たる黒煙に包まれた。

路上不規則に並んでいるM4に対し、我が第一車（丹羽准尉・軽戦車）は敵の先頭車の横を通り越して、その後方のM4と、第二車（西曹長・中戦車）は先頭のM4と刺し違えたのだ。

突入の直前、跨乗の車外員は戦車の背中から飛び下り、蒲団爆雷を抱いてM4



に突入した。

黒煙の中、再び爆発が起る。車外員の一人はM4のキャタピラに爆雷をかませ、発火したと同時に爆風にはね飛ばされ、崖縁に引っかかり、今にも谷底に落ちそうになっていた。その兵長はハッと我にかえり、崩れる崖に足を踏みしめながら目を凝らすと、敵戦車の乗員は戦車を捨てて敵方に逃げ出した。彼が手榴弾を投げつけると二、三名が一度に倒れた。

彼我戦車は火を吹いている。我が特攻隊の乗員は全員死んだのか。しかし奇跡、見るや火を吹く戦車の前扉から第一車の操縦手、平野伊孝軍曹が躍り出た。短剣をかざして敵中に突入したが、腹部に機関銃弾を浴び倒れた。第二車の操縦手平野国雄軍曹は、砲塔から飛び下りるや日本刀を抜き敵中に斬り込んだ。右腕に機関銃弾を受け、刀をとり落とすや、これを左手に持ちかえ、敵に斬り込む姿を見せたが、その瞬間胸部に銃弾を受けその場に倒れた。

時に十七日午前九時三十分であった。』  
特攻生還者の言

さて次に、この特攻に参加して生還し得た二人の一人、道清茂氏（十五年次・軍曹）の話を聞こう。

『四月十五日、午後八時軍司令部を出発した丹羽准尉以下十一名の特攻隊は、暗

闇のナギリアン道をイリサンに向い進んだ。走る約一時間にして、どこかの部隊の戦闘司令部に到着した。ここで丹羽、西の両車長は連絡のため中に入っていった。残された我々は地形を利用して、敵砲撃に対して安全な所に戦車を入れて待機していましたが、一人はなかなか帰って来ないので、結局一夜を明かすことになつてしまいました。

夜が白々と明け始めた頃からこの辺一帯に対して敵の集中砲撃が始まり、その日の近くに友軍の高射砲陣地があるから大丈夫そうです。

夕方近くになつて二人が帰ってきました。そして云われるには

「敵の戦車は夜間は第一線から後方に退避しているらしい。それ故、戦車特攻は昼間しかできない」とのことでした。

日はすっかり暮れた七時頃いよいよ出発です。砲撃の合間を縫ってイリサンに向いまいした。イリサンの小さな橋を渡り、川の前に出ました。戦車が渡り終ると、我が工兵がその橋を爆破してしまったのです。

（筆者注・この爆破は敵M4戦車の進撃阻止のため）

考えて見れば、このイリサン川が生死の分れ川に変わったわけです。これが最

後かと気分は弥が上にも緊張しました。それからすぐに、橋の近くで九号道路から一寸入った所、竹藪がある小さな凹地にかくれました。敵を目の前にして、背水の陣です。

その夜は、一晩中、戦車を偽装していました。我々が懸命に近くの木を切つてきて偽装しているとき、友軍の兵隊がどどんバギオに向つて後退して行きま

た。夜目に、我々の戦車を見て、戦車特攻を感じたのか、誰もが、戦車のそばまで見に来て

「しっかりと頼むぞ」と励ましてくれました。その時携帯の食料は既に無くなつており、朝から何も食べていませんので「何か食べ物はないか」と聞くと、皆気前よく米、塩、携帯口糧などを、食べきれない程、置いていってくれました。食料を腹一杯食べ終わったのは、真夜中でした。

翌十四日夜明けとともに、戦闘準備を完了して待機しておりました。八時頃敵の銃砲火が一段と激しくなりました。七時頃、あの巨大なM4戦車が三両、前方の曲がり角に現れ、所かまわず砲、銃撃を加えてきた。特に我々が隠れている所より更に後方曲がり角の小さな山（ゴブ山）に対しては激しいものでした。ここ

はコブのように少し高くなっていたので、敵は日本軍の陣地と思ったのでしよう。これが三十分近く続きました。

私は、車外員でしたので戦車のそばで敵情を監視しておりましたところ、突然飛上るような衝撃を右膝に受けました。機関銃弾を受けたのです。丹羽隊長は直ちに他の車外員に、三角布で私の傷口の止血を命じました。

その時何故か敵M4の先頭車が、急に反転を始めたのです。

「遮蔽物をとれ」

「発進準備」

「攻撃前進」

痛みをこらえている私の耳に、矢継早に丹羽、西両車長の声が聞こえました。

二両は私を残したまま、勇ましくガスを吹かして、敵に向い突進していきましました。そして砲撃音と爆発音が激しく聞こえるばかりでした。

以上は、ほんの瞬間の出来事です。私はそれから直ぐ、誰か、一、二人の手によつて後方の曲がり角の壕に運ばれましたので、誠に残念ながら特攻の最後を、この目で確かめることはできませんでした。

この時タコツボに入っていた歩兵隊の肉攻班から聞いた特攻隊の最後の様子は我が戦車の体当りによつてM4一両が左

崖下の谷に落ちたこと。

後の戦車から、前の扉をあけて飛び出した人は、軍刀をかざした敵に斬り込んだことの二件でした。

私は無性に喉が乾き、水を飲むため一人でイリサン川の近くまで這って行きましました。そこで、そこにいた他部隊の三人の兵に救出されたのです。

動けなくなった私が、まさか、バギオの本隊に生きて帰れるとは夢にも思っておりませんでした。誠に奇跡と思ひ、その三人の人に感謝いたしました。そして体当りを敢行して、見事に敵戦車を仕留め、帰らぬ人となった戦友の最後を細かく桜井隊長に報告する事ができました。

その後、私がトリニダットから担架に載せられて後方に送られるとき数人の負傷者が一緒でした。この中に中山誉雄兵長がいました。彼は今でいうショックで頭に傷らしい傷はないのですが、戦車が突

入したときの様子を、どうしても思い出せないとき、しきりにこぼしていました。その後、十五キロ地点の野戦病院で皆バラバラになってしまいましたので、彼と再び会うことはできませんでした。

道清氏の話が一段落したので、ここで筆者は

「M4の先頭車が急に反転を始めたのは、何故と思えますか」と、尋ねた。

『特攻隊が隠れていた場所から敵方にかけて、道路両側に歩兵隊のタコツボが無数にありました。そのタコツボの中に肉攻兵が入っていたので、M4はこれに気付いて危険を感じ急に反転したのではな

いかと思います。M4の第一車は、その第二車と少し距離が離れ過ぎていて、その周辺には未だ敵の随伴歩兵がついていなかった。それで我が肉攻を恐れて、少しでも後方(M4の第二車の近く)へ下がろうとしたのでしよう。そこで我々特攻隊としては

「折角M4を目の前にして、ここで逃げられてたまるか。今だ！それ行け！」ということだったのです。

そして我が戦車が突然現れて突進して行ったので敵は狼狽した。そこに突っ込んだのです。』

道清氏の話はこれで終わるが最後に『悪戦苦闘し異国の山地に散った戦友のことを思うと、断腸の思いがします。玉砕した戦友のために、なんとかこの記事をまとめて後世に残してください。御願ひします。』と筆者(鹿江)に頼み、落涙暫し。

年月が経つのは早いもので、戦後三七年を経た昭和五七年、私は神戸在住の藤原新吉氏(少戦一期)から一冊の本を頂いた。書名は「ルソンに生きた十七歳」。

著者は中山蒼雄（少戦五期）とあるのでアツと驚いた。戦後、それまで私は氏の情報を知らなかつたからである。

この本の中に「M4戦車と激突」という項があり、イリサンの戦車特攻について書かれてあるので、次にそのまま掲載する。

『四月十六日丹羽准尉、西曹長を指揮官とする我が二両の戦車特攻隊は、ナギリアン道を数キロ西下し、イリサン橋を越えて、山蔭の遮蔽位置に到着した。

私は二両目の車外員として出陣、総勢十一名であつたが、搭乗している上官達の名は殆ど承知していなかつた。

操縦手の平野軍曹が、ダイナマイトを詰めた箱を前部の中央突起部に取り付け、安全栓に結んだコードを操縦席の窓口から車内に引き込んだ。

搭乗者の顔は、誰でも硝煙でどす黒く汚れ、昂奮した両眼は狸のように見開き、言葉少なく戦友を見詰め合つた、今度こそ運も奇跡もあるものではない。身体が強ばり喉が乾いた。どうせ死ぬなら戦車兵として私も、操縦桿を握つて突撃したいと思う。車外員として、装甲板の上で、もう来るか、もう来るか（敵M4と激突の瞬間が）と思う緊張の連続は嫌なものである。

九時過ぎになつて、我が先頭車の見張兵が砲塔に駆け上り敵戦車接近の合図を

した。

「さあ、行くぞ！」

私は大きく息を吸い込んだ。

そのとき敵戦車から物凄い一斉掃射が始まつた。カーブの向う側でよく見えないうが、道路両側のタコツボに待伏せしている我が肉攻兵を狙っているのである。そのため肉攻兵は、その殆どが肉迫攻撃の機を得ないまま、その場で倒れた。

やがてM4はゆっくり前方のカーブに姿を現した。百メートル程の距離で身構えている我等の戦車と比べ、何と大きく、また格好のよいことか。敵は未だ我々の企図に気付いていない。

その時、予告なく私の乗っている戦車が突然発進した。私は車外員であるので、戦車の背中に乗り砲塔に掴まつていた。それ故、戦車内の車長や操縦手の合図など感知できない。

谷を隔てて、敵と正対するや、素早く我が砲が火を噴いた。見事M4の砲塔下部に命中した。

「やつたぞ！」と思つたが、煙のあとM4に何の変化も起きない。

「それ、二発目を早く撃て！」とM4を見ると砲口は「ピタリ」我車に向けられている。そのとき、我が先頭車が排煙を蹴つて突進し、そのM4の左側面に激突した。瞬間ダイナマイトが爆発、彼我車

両は崖縁転落寸前で擱座した。

と同時に、二両目のM4から発射された徹甲弾は「グワーン」と、私が乗っている軽戦車の前額部を貫き、車内で内蔵弾の爆発を誘発して、車上の私は砲塔と一緒に飛ばされ、地上に転落した。考えられぬことであるが、確かに砲塔がふつ飛んだ記憶がある。

どの位気を失つていたか、どのようにして離れた来られたのか全く分からないが、気が付いてみると、私は封鎖された幹道から谷を隔てた反対側の山腹で、他部隊の数名に収容されていた。

「オイ！しつかりせい」と怒鳴りながら、私を励ましてくれていた。私は、肩と腰の骨が折れているのか、身動きすらできない。

瞰下すると幹道上には一号車とM4が「人」の字になつてカーブを塞ぎ、そのこちら側で、私が乗っていた二号車も、一両のM4と刺し違えたまま全車黒煙を上げていた。我々特攻によつて幹道は完全に塞がれた。

カーブより向う側には、更にM4が二、三両、次に装甲車、トラックなど十数両が連なっている。米兵が沢山、付近に腰を下ろして、のんびりと煙草をふかしているのが見える。

「お前は全く運のいい奴だ。燃えている戦車の傍に倒れていたが、息があつたので、助けて連れて来た。撤退するぞ。早

くしろ！」

燃え盛る愛車を呆然と見詰めていた私は、怒鳴られるように促された。

ふと見ると、私を助けてくれた数名の長は少尉であった。少尉は左足を負傷しているらしく、杖をついて立ち上がった。もしあの時私が、少尉の目に止まっていなかったら、どうなっていたらうか。遺体が石ころのように転がっている特攻の前線で、他の部隊の負傷兵を救出する余裕など有り得ないはずである。情け深い将校と出会うことができたのも、私の武運というべきだろう。

助けられた喜びが込みあげてきた。そして私は痛みを我慢して立ち上がり、なんとなく亡き父に似た少尉の後に従った。度重なる奇跡に対して、私はもしかすると父の霊が護ってくれているからではないかと、初めて本気に思うようになった。激痛に耐えながら暗闇の谷を渡り、山を越え、夜明け前、我々六名は、トリニダツト農場に辿り着いた。』

(中山誉雄著)

から抜粋を終る。

**特攻隊の編成装備**

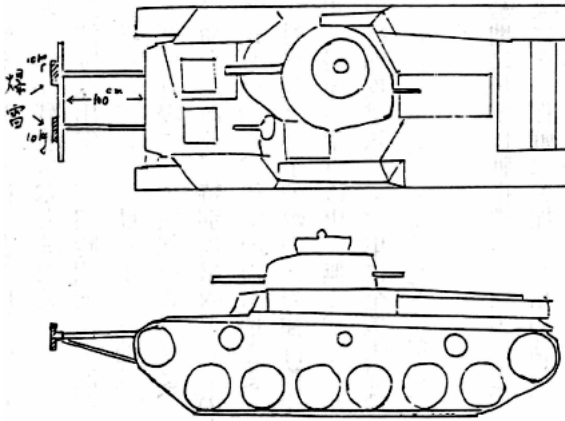
次に道清氏によって明らかにされた特攻隊の編成装備、戦車の爆雷装着図を掲げる。

(一) 編成  
特攻隊長 准尉 丹羽治一 (旧姓宮浦)  
以下十一名

車外員	銃手	砲手	操縦手	車長	
兵長 兵長	伍長 伍長		軍曹 軍曹	准尉 丹羽治一	軽戦車
中山誉雄	黒川利美	末吉清一	平野伊孝	曹長 曹長	中戦車
田村平一	道清 茂	四方 驥	平野国雄	西 利良	
			浜野音蔵		

上面図

側面図



戦車特攻の現地

(二) 車外員の服装  
鉄兜、小銃、手榴弾数個、丸形爆雷一  
水筒、雑嚢は携行せず  
食料は一日分



## 顕彰譜 (1)

会報11月号でご報告したように特別攻撃隊全史第2版を出版致しました。

従来の「顕彰譜」の写真は白黒写真でしたが、第2版出版に当たってカラー化と慰霊碑等の追加等を致しましたので、今号以降、順次ご紹介させて頂きます。

## 特別攻撃隊の頌 (靖国神社遊就館・世田谷観音)

### 特別攻撃隊の頌

わが国が存亡をかけた大東亜戦争においては、開戦当初から生還を期すことのない特攻作戦が決行された。

弱冠十七、八歳から三十歳代までの勇士が、肉親への愛着を断ち切り洋々たるべき人生を捨て、空に、海に、陸に、決然として肉弾攻撃を敢行し、偉大なる戦果を挙げ、ことごとく散華された。その数およそ六千柱、壮烈無比なこの攻撃は敵の心胆を寒からしめ、国民はひとしくその純忠に感涙した。

特別攻撃隊の戦闘は、真は至高至純の愛国心の発露として国民の胸奥に生き続け、また世界の人々に深い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている。

ここに心から愛惜の情をこめて特別攻撃隊の諸史料をこの遊就館に納め、その精神と偉業とを後世に伝える。

昭和六十年十二月八日

特別攻撃隊慰霊顕彰会

会長 竹田恒徳

上記文面を刻んだ碑が、靖国神社遊就館内と世田谷山観音寺内「特攻平和観音」の堂の前に建っている。



### 金石に刻んだものは永遠

靖国神社や護国神社の祭祀は絶えることはないが、戦友が主催する慰霊行事はやがて消滅するのは当然である。

そのときになっても後世に語り伝えてくれるのは、金石に刻んだ碑である。

我々は慰霊祭と称して祭文を読み、玉串を奉ったり焼香したりするが、若い者が参列しておればまだしも、戦友だけでは自分達の気持ちを暗らすに過ぎない。国に殉じた人達就中特攻隊員の精神を、確かと後世に伝えることが最大の慰霊であり、そのためにも碑の価値は大なるものがある。

遊就館の特攻隊展示物



新装成った遊就館（平成14年7月13日）



英霊の御魂の集う靖国神社



水上特攻（①と震洋）



特攻隊員の像（屋内）



特攻隊員の像（屋外）



水中特攻（回天の出撃）



航空特攻（出撃）



特操の碑



伏龍



空挺特攻（義烈空挺隊出撃にあたり郷里に別れを告ぐ）

零戦 航空特攻の先陣となった敷島・大和・朝日・山桜より成る第一神風特別攻撃隊がこの機種だったのを初めとし、最も多い三三二機が特攻として使われた。



彗星 第一神風に一部使われ第二神風や増援神風でも使われ、更に翌20年になってからは菊水彗星隊も編成され、通算して一三五機が特攻として使われた。



人間魚雷回天



桜花



館内にはこれ以外に特攻隊員の遺影や遺書等も展示されているが、ここでは造形物だけを紹介した。



## 世田谷山観音寺 特攻平和観音



### 由来

陸海軍特別攻撃隊烈士の英魂を大慈悲の観音像に顕現し、その忠烈を顕彰しようと海軍大将及川古志郎、同高橋三吉、陸軍大将河辺正三、陸軍中将菅原道大、海軍中将寺岡謹平等が発起人となり、有志の方々に喜捨を仰ぎ、昭和二十七年春平和観音像を建立した。同年五月五日音羽の護国寺において、開眼供養が盛大に行われ、特攻平和観音と称することになった。

この観音像は大和法隆寺の夢殿に奉安してある秘仏「夢ちがい観音像」を特別の許可を得て模造したものであり、一尺八寸の金銅像で、胎内に特攻烈士の英名を謹書した巻物を奉蔵してある。

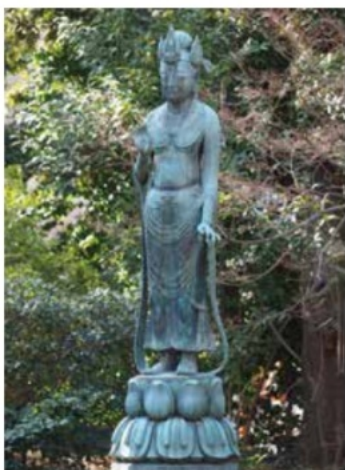
特攻平和観音は護国寺境内の忠霊堂内に安置されていたが、世話していた白蓮社の解散に伴い特攻平和観音をお守りする者が無くなってしまった。有志の人達が寛永寺その他の寺に交渉したが、なかなか受け入れられなかった。

ところが、この話を伝え聞いた世田谷山観音寺の開祖太田睦賢大僧正は、特攻観音独自の堂宇建立の悲願を立て、元華頂宮家の持念仏堂を境内に移築することになったが、その完成を見ずに昭和三十年五月二十四日に遷化された。そこで後を継がれた御子息の賢照師が先代の意を体し観音堂を完成、昭和三十一年五月十八日に落慶法要を挙行して、特攻平和観音を遷座された。

最初の特攻平和観音は、陸海軍航空特攻の烈士のみを顕彰するものとされていたが、その後舟艇関係の特攻烈士を追加合祀し、現在四千六百有余名の英名が観音像の胎内に奉蔵されている。

境内の池の中にある観音像は、特攻観音と同形のもので、昭和四十八年九月二十三日に開眼法要が営まれたものである。

老朽化が進み観音堂は平成十六年春から同十七年秋にかけて、会員の寄進によって、根太・欄干・正面扉を中心として大改修が行われた。



池の中にある観音像



この碑も境内にある (10 頁参照)



观音堂の厨子内に奉安されている特攻平和観音像 (右)には海軍の (左)には陸軍の特攻烈士霊名簿が奉蔵されている。

### 特攻平和観音奉賛会

奉賛会は昭和二十八年に有志により組織され、三十一年に拡大されて遺族と有志が一体の組織となった。

五十七年に元皇族の竹田恒徳様を会長に戴き特攻隊慰霊顕彰会、更に平成五年に財団法人化されて、特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会へ、平成二十三年公益財団法人に認定され特攻隊戦没者慰霊顕彰会となった。

毎月十八日午後二時から月例法要を取り行い、有志の者が住職の太田恵淳師と共に読経供養している。毎年秋分の日には、午後二時から年次法要を挙行し、浅草寺一山式衆のもと多数の遺族戦友が参加して厳修されていたが、平成十九年からは、この地の氏神である駒繋神社と神仏習合で実施される様になった。

### 所在地

東京都世田谷区下馬四一九一四  
(〇三―三四―〇一八八一)

### 交通案内

渋谷駅・目黒駅よりバスの便あり  
世田谷観音下車



## 連載山ある記13

千葉県「鋸山」  
会員 池田 康博

NHKのBSで「日本百低山」という番組が始まった。標高千五百m以下の山を「低山」としているようで、その栄えある第1回目として11月23日に「鋸山（のこぎりやま）」が放送された。

鋸山（標高三百二十九m）には2回は登っていると思っで見ていると、実は登ったのは観光名所の「地獄のぞき」までで、何と！山頂は別の場所にあった。最も、今まで鋸山に山頂があることを意識したことはなかった。そこで早速、一等三角点のある鋸山山頂を目指そうと地図を手に入れ出かけた。

車を東京湾フェリーの浜金谷港駐車場に停めて、8時45分に出発、電車ならばJR内房線の浜金谷駅となる。民家の間の狭い道を地図と案内板に従って歩いて行くと、9時3分、鋸山登山の2ルート「関東自然歩道」と「車力道（しやりきみち）」の分岐点に着いた。今回は上りを車力道、下り



車力道

は関東自然歩道と決めていたので、左の車力道にとり、9時14分に車力道入口に着いた。車力道とは、



展望台からの眺め

絶景を堪能した後、再び登山道に戻り頂上を目指す。鋸山の峰のせいか、小さいが急な登り降りを4、5回繰り返して10時27分に山頂に着いた。山頂は千葉方面の展望しがなく、早々に切り上げて

鋸山の頂上部で切出した房州石を木製の荷車で運び出した道だそうで、昭和三十五年頃まで続けられたという。運搬した女達を「車力」と呼んだそうだ。今は登山道となっている、びっしりと敷き詰められた石畳の道には轍が残っており、その大変な労働を忍びながら登って行った。

山の上部にある石切り場跡は、車力道と関東自然歩道の合流点だが、垂直に削り取られた岩壁に圧倒される。ここから登山道はいよいよ急な石の階段が続く。その急さは絶壁階段というそうで、岩壁を削り出して作ってあり、一段一段の高さも向う脛くらいの高さである。手すりを頼りに登りきると、登山道を一寸逸れて展望台がある、ここから見下ろすと、手前に「地獄のぞき」が見え、その先に鋸山ロープウェイの山頂駅があり、その先は東京湾で、湾の向こうには富士山を望むことができた。

下山にかかる。途中、再び展望台に寄って東京湾や南房総の山々を眺めながらゆっくり昼食を摂った。



鋸山山頂

11時30分、再び下山開始、車力道との分岐で関東自然歩道に道を取り、石切り場跡の溜池や洞窟、岩舞台など盛時の活況を思いながら見て回ったが、一方で、岩舞台に放置され赤錆びたままの重機や溜池に一匹で寂しく泳ぐ緋鯉に廃墟感が漂う。

石切り場跡からは、左右が切り立った尾根道で、東京湾や浜金谷の港を見ながら、そして時にはギザギザの鋸山を見返りながら下って行った。途中からはきれいに整備された階段の下り道になっており、スタート地点の分岐に着いたのは12時25分であった。

今回は、地獄のぞきや日本寺といういわゆる観光ルートではなく、鋸山の本当の姿を認識できたような印象深い山歩きとなった。

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 征く君の 瞳にとどけ 冬の花

淳

● 花時雨 やまず続けと 願えども

雲の晴れまに 君は飛び征く

淳子

● 除夜の鐘 逝きし友らの 顔浮かぶ

よみびとしらさず

● 大丈夫か？ひ孫気遣う 90才

● 耳鳴りの 音も慣れれば 蝉しぐれ

井下駄マスオ



**事務局からの連絡事項**

一 令和2年度第3回理事会及び第1回臨時評議員会の実施報告

昨令和2年11月17日(水)に、第3回理事会が、12月17日(木)に、第1回臨時評議員会が、それぞれ開催され、令和3年度事業計画及び収支予算(正味財産増減予算書・案)が審議され、いずれも令和3年度計画として承認されました。なお、令和3年度事業計画の骨子は次のとおりです。

び評議員は、次のとおりです。  
理事等

- ア 第42回特攻隊全戦没者慰霊祭  
靖国神社  
令和3年3月27日(土)
- イ 第70回特攻平和観音年次法要  
世田谷山観音寺  
令和3年9月23日(木・祝)
- (2) 各護国神社への「あゝ特攻勇士の像」奉納
- (3) 全国各地慰霊祭への参加、協賛
- (4) 機関誌「特攻」の発行(年5回)
- (5) 特攻隊戦史他の調査研究と資料の収集

会長	杉山 蕃
理事長	藤田 幸生
副理事長	岩崎 茂
専務理事	
兼事務局長	石井 光政
業務執行理事	鮎田 英一
業務執行理事	福江 広明
理事	白田 智子
理事	大穂 園井
理事	岡部 俊哉
理事	久納 雄二
監事	阿部 軍喜
監事	羽瀨 徹也
評議員	
秋山 政隆	及川 昌彦
太田 兼照	倉形 桃代
長瀬 彰孝	新垣 敬輝
早川 雅彦	深山 明敏
原島 淳子	岩成 真一
原 知崇	宮本 雅史
永井 昌弘	高松 真希
國分 雅宏	

二 第42回特攻隊全戦没者慰霊祭の縮小

齋行について  
靖国神社における第42回特攻隊全戦没者慰霊祭(令和3年3月27日(土))は、

まだ新型コロナウイルスの感染が収まらないため、感染防止のため、役員のみにて齋行することとします。  
英霊ならびに会員の皆様には誠に申し訳なく、断腸の思いですが、事情ご賢察のうえご了解いただきたくお願い申し上げます。

なお、玉串を奉納される方は、同封の「郵便払込取扱票」にてお送り下されば、ご芳名を添えて奉納させていただきます。  
三 会報記事の訂正について  
会報一三二号(8月号)  
45頁1段目5行目

- 誤 「八紘第一 勤皇隊」
- 正 「八紘第一 皇魂隊」
- 皇魂隊隊員 三浦恭一中尉のご令弟様 三浦雅夫様(陸士61期)からご教示いただきました。
- 会報一三三号(1月号)
- 1頁目次
- 誤 靖国神社宮司 山口健史
- 正 靖国神社宮司 山口建史
- 4頁3段目8行目
- 誤 金甌無<sup>レ</sup>欽
- 正 金甌無欽
- 8頁 ⑩靖国神社春季例大祭(当日祭)
- 誤 4・21(水)
- 正 4・22(木)

(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会  
令和3年度 正味財産増減予算書

令和3年1月1日から令和3年12月31日まで

(単位:円)

科 目	3年度予算	2年度予算	2年度見込	対前年予算増減	備 考
I 一般正味財産増減の部					
1 経常増減の部					
(1) 経常収益					
① 基本財産運用益	12,837,000	12,640,000	14,615,000	197,000	
② 特定資産運用益	300,000	280,000	150,000	20,000	
③ 年会費	3,500,000	3,500,000	3,462,000	0	
④ 慰霊事業益	2,250,000	2,250,000	1,338,000	0	
⑤ 出版事業益	50,000	80,000	8,600	△ 30,000	
⑥ 受取寄付金	3,300,000	4,100,000	3,346,000	△ 800,000	2' 実績参考
⑦ 雑収入	0	0	4,526	0	
経常収益計	22,237,000	22,860,000	22,924,126	△ 613,000	
(2) 経常費用					
事業負担金	780,000	780,000	1,364,000	0	
像制作委託費	1,840,000	1,320,000	2,002,000	520,000	
発送等委託費	2,720,000	3,780,000	4,024,000	△ 1,060,000	
他団体助成費	2,100,000	1,970,000	1,815,000	130,000	
役員報酬	300,000	300,000	300,000	0	
給料手当	5,430,000	5,710,000	6,330,000	△ 280,000	
福利厚生費	840,000	881,000	842,000	△ 41,000	
旅費交通費	4,380,000	3,578,000	1,072,000	802,000	
通信運搬費	695,000	672,000	943,000	23,000	
減価償却費	32,978	32,978	60,497	0	
退職手当	0	0	594,000	0	
消耗品費	680,000	860,000	502,000	△ 180,000	
印刷製本費	1,190,000	4,193,000	4,593,000	△ 3,003,000	
会議費	197,000	197,000	102,000	0	
光熱水料費	137,000	137,000	130,000	0	
貸借料	3,250,000	3,250,000	2,884,000	0	
諸謝金	200,000	200,000	25,000	0	
臨時雇賃	960,000	400,000	1,096,000	560,000	
経常費用計	25,731,978	28,260,978	28,678,497	△ 2,529,000	
評価益等調整前経常増減	△ 3,494,978	△ 5,410,978	△ 5,754,371	1,916,000	
基本財産評価損益等	0	0	0	0	
特定資産評価損益等	0	0	0	0	
当期経常増減額	△ 3,494,978	△ 5,410,978	△ 5,754,371	1,916,000	
2 経常外増減の部					
(1) 経常外収益	0	0	0	0	
貯蔵品資産受入	0	0	0	0	
資産計上	0	0	0	0	
投資活動取益計	0	0	0	0	
(2) 経常外費用	0	0	0	0	
特定資産への振替	0	0	0	0	
貯蔵品除却損	0	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	0	
当期経常外増減額	0	0	0	0	
当期一般正味財産増減額	△ 3,494,978	△ 5,410,978	△ 5,754,371	1,916,000	
一般正味財産期首残高	277,908,086	280,581,131	283,662,457	△ 2,673,045	
一般正味財産期末残高	274,413,108	275,170,153	277,908,086	△ 757,045	
II 指定正味財産増減の部					
一般正味財産から振替	0	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	0	
III 正味財産期末残高	274,413,108	277,908,153	277,908,086	△ 3,495,045	

寄付者御芳名(敬称略)

(令和2年10月1日～12月31日)

(単位千円)

- 五〇〇 島崎 宗勝 一〇〇 吳 奈々子
- 三〇〇 石田 賢一 一七 横川るみこ
- 一〇〇 ファンデルドウス瑠璃
- 七 茂木 尚 七 市川 雄一
- 七 橘 正幸 五 原田 洋
- 五 中島 尚史 四 伊室 一義
- 三 平田 重夫 二 廣川 恭子
- 一 殿谷 章

新入会員名簿(敬称略)

(令和2年10月1日～12月31日)

- 山形 天野 優也
- 茨城 行方 滋子
- 千葉 奈良 勉
- 東京 佐藤 三恵
- 野々田洋介
- 三重 川原田 陽
- 埼玉 吉田 文治 (2・3・7)
- 日高 誠 (2・12・22)
- 千葉 中村 貞三 (2・12・9)
- 東京 星出 寿夫 (1・11)
- 神奈川 吉利 正勝 (2・12・17)
- 兵庫 石田 正規 (2・11・29)
- 長崎 向井嘉太郎 (2・3・16)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことには忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰(他団体への参加を含む)
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は左記宛てとして下さい。

〒102-0007 2

東京都千代田区飯田橋一丁目5-7

東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596

E-mail [jimukyoku@tokkotai.or.jp](mailto:jimukyoku@tokkotai.or.jp)